

日本郭沫若研究会事務局

二〇一九年七月二〇日発行

郭沫若全集會報

第二十一号 (総 No. 22)

## 目次

- 中国における四十年来の郭沫若研究の進展及び可能性／李 斌・著／岩佐 昌暲・訳／ 1
- 成仿吾の欧州行 二二成仿吾の文学論 — 欧州へ向う直前の活動(下) —／成家 徹郎／ 7
- 郭沫若の院士当選原始档案に関する考証／沈 衛威・著／藤田 莉那・訳／ 16
- 追いつめられて文学の道へ 与つて力あつた日本の外国語教育 — 深若自伝』を読む(四)／上野 恵司／ 25
- 2018年度日本現代中国学会全国学術大会・文学分科会
- 《郭沫若研究の現在—郭沫若逝去四〇周年、文学活動開始一〇〇周年にあたって》報告要旨／ 27
- 『安神』と五四の時代精神との関係性／武 継平／ 27
- 郭沫若戯曲の今日的意義—『蔡文姬』を中心に／瀬戸 宏／ 28
- 亡命期郭沫若と日本の雑誌社との関係／藤田 梨那／ 29
- 文学史叙述と郭沫若像の再審／坂井 洋史／ 30
- 執筆者・翻訳者紹介／ 31
- 編集後記／ 31

# 中国における四十年來の郭沫若研究の進展及び可能性

李斌／岩佐昌暲訳

## 1

郭沫若の逝去から現在まで、すでに四十年になる。私はこの四十年の郭沫若研究を3つの段階に分けてみたいと思う。第一段階は一九七八年から一九九八年までで、研究の最初の高揚期【高潮期】である。第二段階は一九九九年から二〇一二年まで、退潮期【沉寂期】である。第三段階は二〇一二年から今日までで、反転復活期【回暖期】である。この三つの時期を簡単に振り返ったのち、私は郭沫若研究の可能性と、警戒すべき点について述べたいと思う。

最初の高揚期は3つの面での成果が指標である。まず、郭沫若の文献資料を系統的に整理したことである。これは郭沫若作品の整理出版を含み、また研究資料の整理と工具書の著述・編集を含んでいる。前者は、例えば『郭沫若全集』（全38巻）、黄淳浩編『郭沫若書信集』（上下）、王錦厚等編『郭沫若佚文集』（上下）など、後者は例えば、蕭斌如・邵華編『郭沫若著訳書目』、『郭沫若研究資料』（上中下）、『郭沫若專集』（上下）、龔濟民・方仁念『郭沫若年譜』（上中下）、王繼權・童煒剛編『郭沫若年譜』（上下）、王繼權等編『郭沫若旧体詩詞系年注釈』（上下）等である。

次いで、郭沫若の伝記、文学研究、詩学研究に関する、いずれも比較的良質の作品の出版である。例えば、伝記では龔濟民・方仁念著『郭沫若伝』、史学研究では林甘泉主編『郭沫若と中国史学』、文学研究における黄侯興著『郭沫若の文学道路』等である。

三番目は、郭沫若研究が組織的に比較的強固な体制を作り上げたことである。中国郭沫若研究会、四川省郭沫若研究会、山東省郭沫若研究会が成立し、学会を組織し、学術誌を創刊した前世紀八〇年

代には、北京の『郭沫若研究』、四川の『郭沫若研究專刊』、『郭沫若学刊』、『郭沫若研究学会会刊』、『郭沫若研究叢刊』、山東の『沫若研究』など。七、八種の郭沫若研究誌が同時に出版される盛況ぶりだった。この時期に郭沫若研究の基礎が基本的に定められたのであり、当時整理された多くの文献資料、形成された学術組織、創刊された学術雑誌や出版された著作は今なお依然として役割と影響力を発揮している。

この時期に勝ち得た成果は豊かだったが、足りない部分もあった。まず、郭沫若研究が当時の社会と文学研究のブームに比べなかったことである。前世紀八〇年代後半、文学研究界では「二十世紀中国文学」と「文学史の書き直し【重写文学史】」が提起された(1)。影響は大きかったが、郭沫若研究者は参与しなかった。史学研究界はパラダイムの転換(認識の枠組みの転換【范式转移】)を経験した(2)が、郭沫若研究者はこれにも向きあおう【対話】とはしなかった。同時に海外の中国学が史学界に大きな衝撃を作り出した(3)。だが彼らは郭沫若については重視しなかった。わずかな研究はあったにせよ、影響がないか、評価は極めて否定的だった。中国の郭沫若研究は海外の中国学の衝撃に比べられず、西洋の学術が比較的崇拜された時代に、やはり周辺化を免れなかった。

次に郭沫若研究は、郭沫若に関する数多くの疑問に効果的に回答しなかった。郭沫若の逝去後、傷痕史学と内省【反思】文学(4)の圧倒的な態勢が確立するにともない、郭沫若にたいする疑問が絶えることなく現れた。これらの疑問は、彼の人品、学風、文学作品の価値などに対するものを含んでいた。むろん、郭沫若は問われる必要がある。だが正常な学術風気では、問う者もまた問い返されて当然である。とりわけ、これらの質疑が、多く風や雲をつかむような不確実なもの、あるいは断章取義的に言葉尻を捕まえてのもの、甚だしくは偽造された材料を根拠にしたものである場合には、である。遺憾なのは、少数の何篇かの文章が書かれた以外、郭沫若研究界は

多くが回避を選んだのだ。

一九九九年、丁東が編集した『反思郭沫若』が作家出版社から出版された。この本は一方的に、余英時、陳明遠、丁東、余杰らの生半可の知識やいい加減なでっち上げの文章を収め、郭沫若を裏表のある二股膏藥的な人物に描き上げ、郭沫若を好ましくない人物にリストアップ【打入另冊】しようという強い願いを表している。これは郭沫若研究の最初の高揚期の終結、退潮期の始まりを示す事件だった。この書物の出版の前後は、資料の整理、専門雑誌や権威的な学術雑誌での論文発表の状況などから、いずれも郭沫若研究の衰退を見出すことができる。

資料の整理から見ると、二〇〇〇年前後になって、『郭沫若全集』編纂の第一段階は基本的に完成したが、第二段階は停止したままになり、また、これ以外の郭沫若研究資料の整理も進展を見なくなつた。郭沫若研究の組織工作からみると、多くの郭沫若研究雑誌が相次いで停刊し、最後には四川の『郭沫若学刊』だけが残った。二〇〇〇年以後、山東省の郭沫若研究会も基本的に活動を停止した。権威的な雑誌での論文発表の指標からみると、『文学評論』は一九九三年から二〇一一年までの二十年近くにわたって郭沫若を研究対象とする学術論文を発表していない。『歴史研究』は二〇〇一年から現在までやはり関連する論文を発表していない。もちろん、郭沫若研究の低調は、より根本的には郭沫若研究の属する中国現代文学研究とマルクス主義史学史研究が前世紀の九十年代以後、これまたいずれも周辺化したことに原因がある。だが郭沫若研究は中心から離れた周辺のさらに周辺に置かれている。これは深く考えてみるに値する問題である。

## 2

二〇一二年、郭沫若研究は活況を取り戻し始めた。この年は郭沫

若生誕百二十周年であり、中国社会科学院、全国文联、对外友好協会など四つの組織が人民大会堂で郭沫若生誕百二十周年記念大会を挙行した。楽山では大型の国際学術研究討論会が開催され、四川郭沫若研究センターは『郭沫若研究文献匯要』（十四卷）を出版した。これらはいずれも活動回復の標示であった。この後、次第に成果が表れるのである。

まず、郭沫若文献資料の整理に新たな進展があった。二〇一四年、郭沫若記念館は『郭沫若全集』編纂の第二段階の活動に動き出し、目下、『郭沫若全集補編』二十七巻の初稿がすでに完成している。二〇一七年には十数名の郭沫若研究の専門家が十五年の時間をかけて編纂した『郭沫若年譜長編』五巻が出版された。国家出版基金の助成項目たる『郭沫若書法全集』（五巻）も間もなく出版される。四川郭沫若研究センターが編んだ『回憶郭沫若作品編校集』（十八巻）はいま出版の準備中である。これらの活動は、いずれも最初の高揚期の文献資料工作をさらに一歩大きく前に進めたものであり、活動回復の実績を体現している。

次に、権威的学術雑誌があらためて郭沫若研究を支持したことである。二〇一二年、『文学評論』が二十年来で最初の郭沫若研究論文を発表した。『中国現代文学研究叢刊』、『文芸理論与批評』、『新文学史料』などの著名な雑誌が郭沫若研究にもますます多くの紙面を与えてくれている。

第三に、一群の若い研究者の著作が集中的に出版されていることである。北京からアメリカに留学して職を得た王璞が、二〇一八年、ハーバード大学出版から『革命の翻訳可能性：郭沫若と二〇世紀中国文化』(The Translatability of Revolution: Guo Moruo and Twentieth-Century Chinese Culture)を出し、私は作家出版社から『女神の光：郭沫若伝』を出版した。二〇一九年、劉奎が北京大学出版社から『詩人革命家：抗日戦争期の郭沫若』を出版した。この三部の著作は郭沫若研究に一定の新境地を開き、ひろく学術界の注

目をまきおこした。

第四に郭沫若研究がしだいに比較的強い組織性を回復してきたことである。二〇一五年から、中国郭沫若研究会は連続して四回、青年論壇を開いた。二〇一七年から、二十年間停刊していた『郭沫若研究』輯刊が出版を再開、若い研究者たちが郭沫若研究に入ってきた。

二〇一二年から今までの活動再開期において、多くの成果はやはり最初の高揚期の延長継続であった。文献資料の整理が依然として主流を占めていたが、最初の高揚期に完成できなかったものを完成させたか、その時期に比較的十分な成果しか上げられなかったものを完全にしたかだった。『郭沫若全集補編』は『郭沫若全集』の第二段階の仕事であり、延長継続と言える。『郭沫若研究文献匯要』、『郭沫若年譜長編』は、それぞれ『郭沫若研究資料』、『郭沫若年譜』をより一層完全にしたものである。

文献資料の整理が依然主流を占めたのには学術理論上の根拠がある。というのも、これまで全集や作品集に収められず散逸していた文章や作品を集め、再構成することや版本の校勘、正しい版本の確定といった基礎的な作業がまだ大変不十分だからである。郭沫若文献資料の困難性の度合いは極めて大きい。

一面では、郭沫若の作品が余りにも多いからである。現在出版されている『郭沫若全集』三十八巻は、彼の全作品の半分を占めるに過ぎず、これ以外にもまだ相当数の作品が全集外に散逸している。散逸している作品は、一部は公開されていないもので、かなり多くの未刊の原稿、未刊の日記、未刊の書信および、情報公開されていない檔案(機関に保存されている個人情報などを含んでいる。このたび我々が編纂している『郭沫若全集補編』も、当然すべてを収録してはおらず、研究者自身が留意する必要がある。

困難のもう一面では、たとえ『郭沫若全集』に収録されている著作であっても、また複雑な版本の状況が存在していることである。

郭沫若の一部の重要な作品と敏感な文章は、いずれも修正(削除や書き加えなど)が加えられてきた。修正が一度や二度にとどまらないものもある。例えば『女神』は四度にわたって修正されている。郭沫若の著作百六十数部は、大部分が版を重ねている。だが、目下郭沫若著作の諸版本に対する比較校勘作業はまだ一定の規模で展開されるに至っておらず、この作業は研究者自身が整理するほかない。

だが、もし文献資料の整理だけを強調するならば、きつとまたあれこれの問題がうまれるだろう。主な問題は、多くの郭沫若研究者にあって、現有の研究パラダイムを固定したまま、現下の中国当代文学と史学史研究を決定しているあれこれの規定的要因を反省しないで、ただすでに打ち立てられている知識系統の完全性と真実性の不足を補充し、完全なものにするという必要性から出発し、郭沫若研究という領域を補充しているだけだという点にある。もしもただこのような目的だけで、しかも郭沫若の研究を契機として、当面の学術研究の主流のパラダイムに挑戦を突きつけるのでないのなら、郭沫若研究は最初の高揚期のように、たちまちにして再び谷底に滑り落ちる可能性が大変強い。

したがって、このたびの反転(活動復活)の契機をしつかりとつかみ、郭沫若を鏡とし資源として、目前の中国現代当代文学と史学史研究の研究分野・領域【学科】のパラダイムに対し、反省【反思】を行い、挑戦を突きつけるべきである。そうしてはじめて郭沫若研究の価値と意義を最大限に発揮できるのだ。

### 3

私からみれば、郭沫若研究をきっかけに、現有の研究の主流のパラダイムに挑戦し、これを更新することについては、以下の四つの可能性がある。

第一の可能性は、郭沫若を読み、研究する過程で、自覚的に現下

の文学・史学界の主流の価値観を疑うことである。最近、ある有名な歴史学研究者が「五四運動の性質と意義」といったような類の(大きな)題目を嘲笑し、意識的に研究を(テーマ別に)細切れ【粉碎】にし、意識的に史学研究をもう二度と政治権力、マスメディア、大衆の注目を受けることのない、ごく平凡な片隅に導き入れようとしたが、このような観点は現下の学界で主流を占めており、私は一部有名な郭沫若研究の専門家のところでも耳にした。文学・史学研究の領域では、ますます大きな研究テーマを重視しなくなり、個人の私的な感性的体験に傾くようになった。ますます、声に出すことのできない下層民衆のあれこれの生命の感覚を問題にしなくなり、自我を一定の階層の趣味の中に閉じ込めるようになった。郭沫若自身は全くこれとは逆であった。彼は終始文学創作と学術活動の意義を強調し、文学・史学研究と現下の社会問題の相互作用を強調し、また歴史研究の価値の方向づけを強調した。それゆえ、郭沫若を読み、研究することは、また現下の学界の主流的価値観と対話する過程でもある。

第二の可能性は、郭沫若を資源とし、ますます固定化されていく文のスタイル【文体】の境界、およびますます強化され、狭隘になっていく専門領域意識【学科意識】を反省することである。八〇年代以来、われわれの文のスタイルに対する認識は時が経てば経つほど固定化されている。詩とは何か、学術論文とは何か、こうしたすべてに、構築された業界の範囲内で共通認識を得た一連の規範が存在する。われわれには専ら現代小説を研究する専門家があり、新詩を研究する専門家があり、学術史を研究する専門家もいるのだ。郭沫若は常にこれら固定化された知識の視野の外にいた。例えば、郭沫若は学術研究のなかに暗に隠喩や詠嘆や風刺を含ませていた。これに対し、われわれは常に評価をおこなう能力を欠いている。しかし郭沫若研究は、われわれに固定化された文体と専門領域の境界を取り払うよう迫り、われわれに新たな現象と新たな挑戦に立ち向かう

思想と能力を訓練するように迫ろうとしている。

第三の可能性は、郭沫若を鏡として、アカデミズム【学院】内の知識生産と学術上の権力を反省し、専門職業化の壁と知識の境界を取り払い、以って新たな文化の大変換の局面【大变局】を迎えることである。私にはある感覚がある。今や五四新文化運動の前夜に似た一つの大きな時代が来ているという感覚である。新文化運動は文化のパラダイム全体の転移を完成させた。当時旧い研究パラダイム、文体、言語などは迅速に退場し、新たなパラダイムが主流を占めた。交流方式の改変、インターネット文学、ネット上のバーチャル社会集団の勃興にともない、前世紀八〇年代に構築された中国現代当代文学の研究パラダイム、史学史、思想史の研究パラダイムにはいずれも速やかな変化が現れるだろう。このような変化を前に、アカデミズムの知識分子が握っていた知識を差配【安排】する権力構造の方式と局面にも必ず改変が発生するに違いなく、伝統的な研究対象と専門の壁にもいくらかの変化が起こるだろう。郭沫若は新たな学術資料、新たな文芸現象、および専門化された学者の身分に直面した時、いずれも八〇年代以来の学界の主流と違うやり方をした。この大きな変化の局面で、郭沫若を鏡とし、われわれの身分、姿勢、研究方法を調整するのは、郭沫若がわれわれにもたらすことのできる最大の啓発である。

第四の可能性は、郭沫若を手掛かりとして短かい二〇世紀の世界文学【短二十世紀世界文学】という枠組みで中国の革命文学と社会主義文学を講述することである。「短二〇世紀」という概念について、私は汪暉先生によって中国化された後の言い方を借りている(5)。彼は一九一一年から一九七六年までを「短二〇世紀」と称したが、「短二〇世紀」の主要な特徴は革命である。「短二〇世紀」の角度から言えば、中国革命と社会主義建設は全世界の植民主義反対【反对殖民】と帝国主義反対に対し重要な意義を具えている。植民主義反対と帝国主義反対を主題とする世界的範囲内の文学作品と文学現象は、

短二〇世紀世界文学と称しているが、中国の革命文学と社会主義文学は短二〇世紀世界文学の枠組のもとで重要な意義を占めている。郭沫若は言語の境界を越え、文化を越えた存在である。彼はドイツ語、英語、日本語の三つの言語を理解した、マルクス主義の經典著作、詩歌、戯劇、小説、科学書と考古学理論など五百余万字の作品を翻訳した。彼はまた中国革命文学と社会主義文学の傑出した代表でもあり、被压迫国家と民族、社会主義国家の中に比較的大きな影響を有している。

郭沫若は日本とソ連の資源(学術研究や文学理論上の種々の蓄積と成果)を手本に借り、それを総合した結果、思想に根本的な変化が生まれた。彼は一九四九年以後、長期にわたって世界の平和を守る活動に従事し、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ、ヨーロッパにあまねく足跡を残し、世界各国の反戦活動を行う知識分子と密接な連携を保った。郭沫若を手掛かりとして、二〇世紀中国文学を短二〇世紀の世界文学の枠組のもとに置くこと、それはやがて中国文学と社会主義文学の覆い隠されてしまっている巨大なエネルギーを発掘し、既存の文学史の枠組みをこじ開け、世界文学と二〇世紀の中国文学に対し全く新しい理解をもたらさざらう。もちろん、このような研究は難度が相当大きい。だが、わたしはこうした研究に従事できる主体はすでに次第に成長し始めていると考える。彼らは多種の言語に通じているだけでなく、さらにグローバルな学術的視野をも具えているのである。

もちろん、郭沫若研究者としては、郭沫若研究の中に現れるであろう問題にも注意する必要がある。

まず、研究方法から言えば、郭沫若研究は作家論に属すのだが、作家論が発揮できる役割には結局は限界がある。もし長期にわたって一人の作家の著作に入り浸っていたら、その作家の考えを自分の考えとし、その作家の視野を自分の視野とするようなことがたやすく生まれる。これは非常に危険である。

次にあれやこれやの反面材料は弁証法的に分析すべきである。異なる角度から郭沫若が代表するそれぞれの歴史を辿って問うてみることだ。あれこれの細部において郭沫若は確かに恥知らず扱いされているかもしれない。だが、郭沫若に向けられる疑問の来源は幅広だけでなく、強力であり、これは研究者に重視されるべきである。

思想文化界では、八〇年代以後確かに比較的大きな断裂を経験し、多くの人がもはや郭沫若の作品や行為を理解できなくなつた。こういう無理解が、以前、私は理解できなかった。いま、私は郭沫若に對するこのような無理解をも尊重し、平静で穏やかにそれと向き合う【対話】べきだと思つている。いずれにせよ、郭沫若に代表されるあの種の思想や行為は結局は大多数の人に捨てられたのだ。

ある思想や行為が失敗する理由は、必ずその内部に致命的な問題があるからだ。八〇年代から今日に至る主流の文化思想を適切に吸収し、郭沫若の遺産と結びつけられ、きつと郭沫若自身がわれわれにもたらしてくれるものよりも、さらに豊かな成果を得ることができらう。

#### 訳注

(1) 文革後、七十年代末から八十年代初めにかけて中国の文化界は全分野にわたって一大変化に見舞われた。その最大の理由は78年12月の中共11期3中全会を起点とする中共党の「階級闘争から経済重視へ」という路線転換がもたらした中国社会の変動だった。その変動の一つに、建国以後途切れることなく続いた思想・政治運動の被害者に対する評価の転換があった。特に文化界では運動によって職と地位を失い、文化界から追放された知識人の数は膨大だった。文革後の路線転換は、こうした知識人を復活させた。だがそれは、同時に、当然ながらこれまでの思想・政治運動に対する再評価を促さないわけにはいかなかった。批判され、流布を禁じられてきた知識人たちの言説が再検討され始めた。これまで触れることを許されなかった欧米の諸理論が流入した。こうした動向を背景に文学研究の分野でも従前の定

論に挑戦する様々な議論が生まれた。

「二十世紀中国文学」もその一つで、建国後行われてきた現代文学史への問題提起である。建国後、中国現代文学史は五四文学革命期（一九一五）を起点として、それ以前アヘン戦争（一八四〇）までを「近代」、五四期以後中華人民共和国成立（一九四九）までを現代、それ以後を「当代」と時期区分して構想されてきた。しかしそれは、「近代」清朝末期、「現代」中華民国期、「当代」中華人民共和国期」という政治的時期区分と重なる。このような時期区分を取り払い、二十世紀に入ってから中国文学を分割できない一まとまりの有機的な全体として、同時に世界文学に向かう二十世紀の中国文学として扱おうというのが「二十世紀中国文学」の考え方である。黄子平、陳平原、錢理群によって提起され『文学評論』85・5）、88年関係論文とともに出版された『二十世紀中国文学三人談』（人民文学出版社）

「文学史の書き直し」も同じく従来の現代文学史が、中国革命史の政治史主体の叙述モデルに沿った「近代・現代・当代」という三段階で展開され、左翼作家と革命の同調者以外は含まれていないことへの異議申し立てで、真に中国文学という専門領域にふさわしい独立した「文学」の歴史の樹立を目指すものだった。88年復旦大学の陳思和と王曉明が提起、従来の文学史における主流（左翼文学・延安文学・十七年文学・文革期文学）で評価されなかった作家や作品（潜在写作）の再評価を目指した。かれらは『上海文論』誌上で議論を展開したが天安門事件の影響で誌上討論は89年6期で終結した。この論争の影響は大きく、それ以後現代文学史は三段階の叙述モデルをやめ、編者の視点を押し出し、これまで無視されてきた多彩な作家や作品を含むものになっている。陳も自らの主張を盛り込んだ教科書（陳思和主編『中国当代文学史教程』復旦大学出版社、99年9月）を出している。

(2) 建国後の歴史学研究では、進歩史観の政治的観点を重視し、史的唯物論に基づき歴史を説明する「以論代史」的傾向が強かったが、一九八〇年代からは社会史、文化史、人口史などの成果や視点を取り入れ、従来の政治重視の単一の研究モデルの枠を破るようになった。さらに実証的研究方法が回復し、理論に基づく歴史分析から史料・史実に基づく歴史分析へと質的転

換を遂げている（以上は龍小立らの所論の要旨）（龍小立『近代中国史研究的范式轉移及其意义』ネットサイト・博覧群書、01年10月）。

(3) 李斌は海外の中国学の具体例を挙げていないが、この指摘はポール・コーエン（保羅・柯文）、フレデリック・ウエイクマン（魏裴徳）、エドワード・w・サイード（薩義徳）らのアメリカ人研究者の著書が歴史界にもたらした衝撃を念頭においたものだろうと思う。コーエンはその *Discovering History in China* (Columbia Univ. Press, 1984) 邦訳・佐藤慎一『知の帝国主義』平凡社、88年）が、林奇同訳『在中国発見歴史—中国中心観在美国興起』中華書局、89年）で出版されている。ウエイクマンは近代史の専門家で、*Policing Shanghai 1927-1937* (中文訳・章紅ほか『上海警察一九二七—三七』上海古籍出版社、02年）などが、サイードは *Orientalism* (中文訳・王宇根『東方学』三聯書店、07年）を含む著作集「サイード作品系列」全十巻が三聯書店から出ている。

(4) 「反思文学」は文革の悲劇・非人間性を告発した「傷痕文学」を継いで、その問題意識を「なぜ文革のような政治運動が出現したか」へと深めた文学。「傷痕史学」は、文革及び建国後の中国社会主義建設の歩みを、多くの犠牲を生んだ悲惨な歴史とみる歴史観を批判的に評した語のようである。

(5) 「短二〇世紀」はイギリスの歴史家・エリック・ボブズボームが *Age of Extremes: The Short Twentieth Century* (邦訳・河合秀和『二〇世紀の歴史 極端な時代』上・下、三省堂、96年）で提起した概念。加藤哲郎はその内容を「二次の世界戦争を体験した『破局の時代』と、その後の東西冷戦が経済発展競争となった『黄金の時代』で構成される。しかしやがて『地すべり』がおこり、八九年東欧革命・冷戦終焉、九一年ソ連解体でサイクルを終えた」（『思想の言葉』『思想』岩波書店、99年1月号）と要約している。ボブズボームの二十世紀論を下敷きにした汪暉の二十世紀論（『短二十世紀：中国革命与政治的邏輯』香港牛津大学出版社、2015）は、二十世紀の起点を辛亥革命の起きた一九一一年、その終焉を文革の終わった七六年とし、中国の短い二十世紀は「長い革命の世紀」だったとしている。李斌の論は、郭沫若の活動を汪暉のいう革命の二十世紀の中で再考することを主張している。

## 成仿吾の欧州行(三)

成仿吾の文学論・欧州へ向う直前の活動(下)

### 成家徹郎

成仿吾と魯迅の対立について中井政喜はこう述べた。

成仿吾が、魯迅に関して、後年指摘したのは、情勢に対する魯迅の行動の対応の遅さであり、これが成仿吾の目から見ると、「落伍」と映った、としている。陳瓊芝の「関于成仿吾同志的『紀念魯迅』(一九八一年四月)には次のように言う。

成仿吾老は言った。

私たちはその頃年若く、魯迅との論争の中でも、子供のような勝ち気がありました。私たちはすべて日本から帰ってきたもので、内山書店にも腹心の者がおり、魯迅が午前書店で何か本を買ったというのであれば、私たちは午後にはそれを知り、それを買って読んだ。当時、私たちが、魯迅の「落伍」していると考えた理由は次のようなことだった。北伐戦争がすでに始まり、革命者が次々と広州を離れ前線へ行ったが、魯迅はこの時やっと広州へ駆けつけた。蒋介石が革命を裏切った後、広州におれなくなり、それでまたやっと上海へやってきた。そこで、私が主編した『文化批判』で魯迅を批判したわけです。

成仿吾の目から見れば、魯迅には、情勢把握の遅さ、それにとともに行動の遅さがあつて、それが魯迅の「落伍」しているとする理由であった。この点について「与蘇聯研究生彼德羅夫関于創造社等問題的談話」(一九五九年九月)では次のように言う。

問い…左聯前夜の創造社、太陽社と魯迅の論争情況をお話してください。

成仿吾の答え…当時中国の文壇では、魯迅は前の一代で、創造社の成員は後の一代でした。この二者は矛盾するところがあったことはあります。しかし創造社と魯迅とは別に対立するものではなかった。創造社が魯迅に不満だったところは主として一九二七年国民大革命が失敗した後、私たちが次々と広州を離れたのに、魯迅の方は引き続き広州中山大学文学系主任兼教務長を担当し、私たちとともに広州を離れなかったことにあるのです。この点、私たちは彼に対して批判的意見をもっていました。後に創造社の成員、例えば李初梨は文章を書いて魯迅を批判しましたが、主としてこの点を突いていたのです。

ここには成仿吾の誤解もあるが(魯迅が中山大学の職場を辞めたのは、一九二七年四月二十一日頃であり、四・一五からほどない)、後年成仿吾の述べる魯迅に対する主たる不満は、情勢に対する魯迅の行動における対応の遅さにあつたことが分かる。

しかし一九二八年当時、第三期創造社の魯迅に対する批判は、たとえば馮乃超が、

「彼(魯迅)の反映するものは社会変革期における落伍者の悲哀にすぎず、その弟と共に、人道主義的美しい話を暇つぶしに語るのだ。」(馮乃超「芸術与社会生活」一九二七年十二月十八日)としたように、決して行動における対応の遅さに止まるものではない。創造社の魯迅批判は、一九二八年当時、むしろ情勢に対する文学者としての思想・行動全般の対応の遅さ(「落伍」した方)に向けられたものであつた。

言い換えると、一九二八年当時成仿吾の魯迅に対する不満は、現段階の状況に深く規定される文学の在り方という視点から見た場合の、「落伍」した方に対する不満であり、文学固有の問題・内在的文芸史的な視点からのもではなかった。

(以上、中井書)

しかし成仿吾の一九二八年に発表した二篇（「畢竟は醉眼陶然罷了」、「革命文学的展望」）および魯迅の反論を見ると、文学のあり方、文学者の姿勢が主な対立点であることは明らかである。しかも相当激しく対立した。【参照『創造社研究』七一頁〜七八頁】

両者の激しい対立を知るには、魯迅の「醉眼中的朦朧」と成仿吾の「畢竟は『醉眼陶然』罷了」を併せて読むのが分かりよい。中井氏はあえて、後年の回顧文二篇

陳瓊芝「関于成仿吾」と成仿吾「与蘇聯研究生」

を引用して、あの結論を導いたように思われる。これらの回顧文には、よくあることだがやはり後年の弁明のような口調が見られる。当時の状況を知るにはやはり、両者の当時の文章を読むにかぎる。

まず魯迅の「醉眼中的朦朧」（竹内好訳）を紹介しよう。少し長くなるが、対立を正しく認識するためである。了承いただきたい。

（新年が過ぎると、新しい雑誌が続々とあらわれた。）ところで、この各種各様の雑誌は、表現形態はそれぞれちがうにせよ、ひとつ共通点をもっている。すなわち朦朧性を帯びているという共通点だ。この朦朧性の発祥地は、私の見るところ――馮乃超のいう「醉眼陶然」（訳注）で見るわけだが――やはり例の、愛する人もあり憎む人もあるところの、官僚と軍閥とである。

竹内好（訳注）

馮乃超、日本のプロレタリア文学の影響を受けて、李初梨らとともに後期創造社の中心となり、「革命文学」の論陣を張った。「醉眼陶然」というのは、魯迅が酒の名産地紹興の出身であることにひっかけた表現で、かれは『文化批判』創刊号（一九二八年一月）に発表した「芸術と社会生活」という評論のなかで、魯迅をつぎのように皮肉っている。

魯迅というご老体は――文学的表現が許されるなら――いつも薄暗い

料理屋の二階に坐りこんで、窓のガラス越しに醉眼陶然として人生を眺めているのだ。世間がもてはやすかれの長所とは、実のところ円熟した技巧以外の何物でもない。かれを常にとらえているのは、過ぎ去った日々への追憶であり、没落をいたむ封建情調である。要するにかれの立場は、社会変革期における落伍者の悲哀を反映し、弟のあとにくっついておぼおぼと人道主義的なお上品なことはをならべることだ。隠遁主義！ トルストイのようなきたならしい説教者になりさがっていないことが、せめてもの救いである。

実は朦朧は、それほど大したことではない。どんなに革命的な国であろうと、文芸の分野はとかく朦朧性を帯びるものだ。ただ革命者は自己批判をおそれず、明瞭に認識し、勇敢に発言する。この点、中国だけは特別であつて、人の尻馬に乗ってトルストイを「きたならしい説教者」と決めつける男が、中国の「いまの状態」については、「事実、社会のどの面もまっ黒な勢力に支配されている」ことを感じるだけで、トルストイのように「政府の暴力と、司法行政の滑稽きわまる仮面を暴露する」勇氣はその何分の一も持ちあわせていないのだ。（中略）

遅まきのきらいはあるが、創造社は、一昨年は株式募集をやり、昨年は顧問弁護士をやとい、今年ついに「革命文学」の旗をかかげた。かくて復活した批評家成仿吾は、「芸術の殿堂」守護の職務を棄てて「大衆獲得」に乗り出し、しかも革命文学者に「最後の勝利を保証」するに至った。（中略）

成仿吾がプチブル根性を克服せよと人に説くのに「大衆」を「恩恵」と「保護」の材料として使っているが、読みおわって大きな疑問がのこる――

もし「最後の勝利を保証」することが困難であっても、なおかつそうするか？

この点、成仿吾の祝福を受けて今年から発足した『文化批判』誌

上の李初梨の文章のほうが、まだしもである。いかなる階級の出身であれ、また境遇であれ、要するに「プロレタリア階級の意識によって生み出された一種闘争の文学」なら、それでよろしいというのだから簡明この上ない。

成仿吾の「閑、閑、三つ目も閑」という齒がみする声が、私にはまことに趣き深く感じられる。というのは、以前、私の小説がある人から「第一に冷静、第二に冷静、第三にも冷静」と批評された覚えがあるからだ。「冷静」とは、よい批評とはいえない。しかし不思議なことに、それがこの革命的批評家の記憶中枢に衝撃を与えたらしく、そのため「閑」のほうも三つになった。もし四つあれば、『小説旧聞鈔』も書かなかったかもしれないし、二つだけなら、少しはいそがしいわけだから、「奥伏赫斐アウフヘーベン」(Aufgeben)の創造派の音訳で、「排除すること。ただ私は、なぜこんな難解な訳をするのか理由がわからない。きっと第四階級には、原文のままより難解だろう)されなくてすんだかもしれない。残念なのは、二つでもなく四つでもなく、三つであることだ。(傍線は成家が付けた)(中略)

あちら側に「武器の芸術」がある以上、こちら側は「芸術の武器」あるのみ。この芸術の武器は、実際それしかないもので、無抵抗の幻影から脱出して、誌上戦という新しい夢にはまり込むことなのだ。だが革命的芸術家は、それによってのみ自分の勇気を維持できるために、そうするほかない。もしかが自分の芸術を犠牲にして、理論を事実たらしめるならば、おそらく革命的芸術家であることが不可能だ。したがって当然に、プロレタリア階級の陣営のなかにおいて「武器の鉄と火」の出現を待ちうけるべきであり、その出現と同時に「武器の芸術」を手にするべきである。そのとき、もし鉄と火の革命者に一個の「閑」があれば、その手柄話に耳を傾けることによつて、等しく戦士の資格を得最後の勝利をかちとることができる。といつても、社会には無数の層があるので、文芸はとて一筋縄で

は片づかない。この点は先進国に史実があるが、最近の例でいうと、たとえば『文化批判』はすでにアプトン・シンクレア(アメリカの小説家)をつかまえてしまったが、『創造月刊』のほうはヴィニー(フランスのロマン派詩人)を背負つて「前へ進め」をやっているのだから。

もしそのとき(プロレタリア階級が最後の勝利をかちとる)になつて、「不革命すなわち反革命」とか、革命の停滞は「語絲派」の責任だなどと言われなければ、ひとの家の掃除番をやつたつてパンの半かけくらいは食わせてもらえるだろうから、八時間労働の余暇には、私は暗い部屋で、自分の『小説旧聞鈔』を書きつづけ、またいくつかの国の文芸について語りたい。それが自分のやりたいことだから。ただ恐れるのは、成仿吾たちがほんとにウラジミル・イリツチ(レーニン)のように「大衆獲得」に成功することだ。もしそうなつたら、かれらはおそらく飛躍また飛躍、それにつれて私の階級も貴族または皇帝に昇格して、最小限、北極圏へ流刑ということになるかもしれない。著書や訳書がすべて禁止されるのは言うまでもない。

竹内好(訳注)

「文学革命から革命文学へ」は、『創造月刊』第一巻第九号(一九二八年二月)に発表された成仿吾の論文で、原題は「従文学革命到革命文学」。その結びの部分で、かれはつぎのように述べている。

資本主義はいまや終末の日を迎え、世界には二つの陣営が形成された。片や資本主義の残党「ファシスト」の孤城で、片や全世界労働大衆の連合戦線である。すべての細胞は戦闘のため組織されつつあり、文芸工作者もその一翼を担ねばならぬ。前進! この雄壮な叫びがきみたちに聞こえないか? 何人たりとも、中間に留まることは許されぬ。こちらへ来るか、さもなければあちらへ行くかだ! 追隨するだけであつてはならない。まして落伍など問題にならぬ。自覚してこの社会変革の歴史的過程に参加せよ!

努力して弁証法的唯物論を体得せよ。努力して唯物弁証法的方法をつかみ取れ。それはきみたちに正しい指針を示し、必勝の戦術を授けるだろう。

おのれのプチブル根性を克服せよ。かの「アウフヘーベン」さるべき階級に背を向けて、前へ進め、汗にまみれて働く労農大衆の側へ！

明確な意識をもって工作につとめ、ブルジョアの「イデオロギー」が大衆に与えた害毒と影響とを駆逐せよ。大衆を獲得して、絶えずかれらを勇氣づけ、かれらの自信を保たせよ！ きみが全戦線の一分野に立っていることを忘れるな！

真摯な情熱をもって戦場での見聞を、労農大衆の激しい悲憤を、勇敢な行動と勝利の歓喜を描写せよ！ かくして、きみには最後の勝利が保障される。きみは殊勲をたて、一個の戦士たるにふさわしい人物となるであろう。

これ（「醉眼中の朦朧」を見た成仿吾は「畢竟是『醉眼陶然』罷了」を書いて魯迅を厳しく批判した。『創造月刊』第一卷第十一期一九二八年五月。）

われわれは 絶大な好奇心を抱いて、あの勇敢な闘將の顔つき（くまどり）を拜見したいと待っていた。われわれはこう想像した。真っ先に飛び出てくるのは、もし帝国主義国家でなにかクソ文学を学んだ教授や著名人でないなら、必ずやこういうたぐいの連中の影響下で成長した末将であるはずだ。見たまえ！ あっ！ これはなんと奇つ怪な！ このヒゲ先生はなんと我ら中国の Don Quixote（璫吉訶德）——ドン魯迅（原文「璫魯迅」）なのだ！

（成家注：「璫魯迅」は、李初梨「請看我們中国的 Don Quixote 的乱舞」の中の語を受けて使ったもの。その原文は「Don 魯迅」である。）

まあよからう。彼がうたうのを聴こう。このいさましい騎士がうたうのを聴こうではないか！ ところで、彼はいったい何をうたい出すのか！

彼は一句『醉眼中の朦朧』をうたった。彼の詞鋒はまことに、すさまじく狡猾だ。なぜなら、これが彼らセンセイ派の最後の武器だからだ。しかるにその各段の内容ときたら、言い方がどう違っている、それらに共通するところがある。すなわち

「いささか朦朧」である。「この朦朧の発祥地」はどこにあるか？ 「私が見るところ」、意外やわれら中国のドンキホーテの特殊性の上である。

われら中国のドンキホーテは、神経錯乱と大妄想などの症状におかされたばかりでなく、同時に「醉眼陶然」としている。風車を見てもしや神鬼ではないかと疑い、しかも同時に自分は、虚構の神殿の上につまつき坐っていて、鬼神を装って恍惚の境地に沈んでいる。聞くところでは、ドン魯迅の最近最も関心あることはただ自己の毀誉だけである、という。彼は今出ている新聞雑誌に注意している。

というのは、どういう人がどのように称讃し、どういう人がどのように失礼なことをしているか知りたからである。その上、いちど彼の網膜に触れたとたん、「あろうことか、まるで斧の強い一撃が、彼の記憶中枢を打ち割ったかのように、これによって」もう決して忘れることはない。しかも機会があるものなら、それこそまなじりを吊りあげてかならず報復するに違いない。（中略）

この種の特殊性がなぜ必然的に「醉眼中で」朦朧をひき起こしたのか？ 彼が宝殿の上に坐って 毎日注意しているのはただ自己の毀誉だけだからである。一定の期間内では、それでもなんとかなる。大勢の人が彼の面前でうやうやしく敬意を表すに違いない。だが少数の人（たいていはいくらか聡明な青年たち）はそっぽを向いて彼にとりあわない。あるいは聞くに耐えない言葉をすこし言うかもしれない。このとき、われわれの小神は必ずや冷酷な顔つきをさらに

冷酷にして、ひとことこう言うはずだ。『若い人はこんなに傲慢とは！』　『まるで斧の強い一撃が記憶中枢を打ち割ったかのようで、そしてこれによって』この種の青年のにくむべき小影が永遠にドン魯迅の脳中に留まる。しかもドン魯迅の顔つきは一日一日どんどん冷酷になっていく。不幸なことは、ドン魯迅はしよせん孔子にかなわない。彼は結局この種のにくむべき青年を治す方法を持たないし、防ぐ方法も持たない。(中略)

しかるに不幸なのはわれわれのドン魯迅である！　われわれはすでに知っている。この夢遊の人道主義者は、環境のせいでも一日一日冷酷になっていく。いま、彼に対する毀譽の総和と百分比が急激に変化したので、彼はもはや、自己の環境による作用を嘆き悲しむしかない。そこで彼はやむなく、自己を清算することを始めた。彼は時には『すこぶる危険を感じた』、だが時にはそれでも『いくらから安心した』。結局、『もとのように趣味を語る』。だから結果は、『朦朧が少し残る』、結局『酔眼陶然』となってしまう。(中略)

ここでわれわれは、彼がうたう『酔眼中の朦朧』をちよつと検討してみよう。(中略)

第三段で言う。『人道主義式の抗争もない！』われわれの人道主義者は得意になってのしる。われわれは、人道主義者はむろんどんな階級の支配下でもいつも得意であることを知っている。彼らは、意識的にあるいは無意識的に、きまつて支配階級の走狗であるからだ。だから、われらのドンキホーテよ、君の得意ははからずも君の馬脚を現わしたではないか！　しかも革命運動の現段階で、社会に内在する矛盾がすでに先鋭化したときに、一切の抗争は階級意識から出発せざるを得ない。人道主義者の見せかけの泣きつらは、まさにおそまつな道化役者の芝居と同じで、ただ周囲の冷笑をさそうだけだ。

第四段で、われわれのドン魯迅は感慨を禁じることができずこう言う。『遅まきのきらいはあるが、創造社は、一昨年は株式募集を

やり、昨年は顧問弁護士をやとい、今年ついに『革命文学』の旗をかかげた。』

私はここまで書いて、どうしてもこう言わざるを得ない。遅まきのきらいはあるが、ドン魯迅は前年に小説を抄写し、去年(一九二七年)は広東に居て、今年やつと『酔眼中の朦朧』を書いた。われわれは、ドン魯迅が時間・この観念を構成できないことをすでに知っている。彼は、いま依然としてあのうるわしき中世であると思ひこんでいる。

彼の考えでは、十字軍の大攻撃のときに広東に居てかまわない。去年にやつと(上海に)『居た』ことになった。【参照 学研版『魯迅全集』(5)「解説」】「まったく『ちよつと遅すぎて惜しい』だ。これは彼にとつて絶対に正しいことだから、われわれはとやかく言う必要はない。

彼はわれわれの投機について言っている。これも彼から見ればおそらく絶対に正しいだろうから、われわれもとやかく言う必要はない。だが彼は次の一段でこう言っている。

『「大衆」を「恩恵」と「保護」の材料として使っているが、読みおわって大きな疑問がのこる―もし「最後の勝利を保証」することが困難であっても、なおかつそうするか?』

私は、この問題は次のように改めるべきと考える。もしそうなった場合、君は行かないでいられるのか?』

この後でドン魯迅はみづから自己清算の経過を述べるくだりがある。結局彼は『自分はやはりもとのように趣味を語る』だ。

まだある。成仿吾の「閑、閑、三つ目も閑」に対する考証だが、この一点では、われわれのドン魯迅を軽々しく信じることはけつしてできない。というのは趣味を語ることがこの「学者先生」の専門だからで、考証と言うなら、おそらく最後にはわれらの博士・適之(胡適)に上席に坐っていただかなければならないでしょう。これはもちろん私の推量だが、しかし私は結局どうしても軽々しく信じ

ることはできない。

おわりの数段で彼はいわゆる「武器の芸術」に対してこまかく意見を述べている。この点に関して、私は、討論の必要はないと考える。というのは、ドン・魯迅はまったく理解に欠けているからである。

彼は、何がわれわれが言う「武器の芸術」であるか、理解したことがない。すなわち「アウフヘーベン」と「否定の否定」を理解したことがないのと同様である。彼は『文化批判』が Sinclair を紹介し、しかも『創造月刊』が *Leconte* の紹介を継続していることを冷嘲した。たしかにそこに、大きな矛盾がある。だが *Leconte* の紹介は去年以来の続稿で、また『文化批判』のシンクレア紹介も、絶対に彼を「つかまえる」ことはできないのだ。

この点は十分に明らかであると言える。われわれの文学界はいま方向転換の過程にある。対症の理論についての指導と優秀な旧技巧の紹介はともに必要である。だが同時にわれわれは批判の態度も堅持しなくてはならないし、読者大衆に批判の態度をとることについて啓蒙する必要もある。—この一点においては、将来、救わなければならぬし、それは困難ではないことであるとはいえ、われわれは非難されるところがあることは認めざるを得ない。しかし、ドン・魯迅は「文芸はやはりすっかり批判しきることはできない」と考えている。だがこれはまた彼が現在を永久化し、社会を固定化してしまった結果である。

成仿吾はさらに『創造月刊』第十一期の「編輯後記」（一九二八年五月）で魯迅を批判した。

魯迅の最近の *Danagogie* について、我々はもとより反駁を加える必要は無い。なぜなら、彼はまったく耳を傾けるつもりはなく、理もなくさわいでいるのだから、これはおおかたの人に共通する見方である。だがこの種の傾向が非常に破廉恥で許しがたいもので、我々はなんとしても克服しないわけにはいかない。我々は活動の全

体的観点から考えて、時には個人の作品に対して指摘するときもある。ただし我々はそれを一種の傾向として見るべきなのである。個人に対しては、他人によくない影響を与える範囲内にはないのなら、我々は、彼が自ら虚構した宝殿の上に高々と坐して得意になっているのを放任してかまわない。我々は彼をとがめだてして追及することはない。

ところが、彼がすでによくない影響を有しているとき、我々は自ら言わないわけにはいかない。正確な理論をもってこのよくない影響を消滅させざるをえないのだ。理論によつて真理に到達できる。理あつて、論争を処理することができる。ここで、無意味な意識化はほんの少しも必要ない。

この情況を見て、侍桁は「また一つの *Don Quixote* の乱舞」（又是个 *Don Quixote* 的乱舞）で成仿吾を批判した。（一九二八年五月三十一日）

◇ プチブルの意識

私は、最近でてきた語に対してはこれまで「ぼーっ」として理解できなかつた（朦朧）。「プチブルの意識」という語はすなわちその一例である。

ところが昨日新聞に、日本の田中内閣大將軍が政治の困難を避けるために修善寺へ行つて一週間休養をとつた、という記事を見るやすぐに、この語（プチブルの意識）に対して、やつと実証的に理解することができた。

私は日本に住んで数年になるが、修善寺にはこれまで行ったことがない。私はもちろん、日本の文人士政客が何人もそこに行つて休養をとつたことは知っている。だが、そこが一国の首相のようなえらい人物がすずとところだとは、まったく思い至らなかつた。いま修善寺について分かつたので、思い出したことがある。中国の無産階級文学を声高に叫んでいる無産作家・成仿吾である。彼は最近

そこへ行って休養し、轟天動地の大文章二篇を書き、その中に、そこ（修善寺）で書いた、ということを書き記している。

こういうことは私にはなかなか理解しがたい。きれいなスローガンをさげび、自分は時代のさきがけであると自認しているが、やはりもともとある人の欲望がなせるところ。同時に自己の生活と、自己が叫ぶスローガンが標榜する主義との間にやはりどうしても矛盾があり逆行している。この種の弱点は人類一般の内心にみな持っている深い根底であり、けつして何か珍しいものなのではない。もし言うとするれば、やむをえない矛盾についてのみ言うことができるだけである。

しかし我々が理解できないのは次のことである。なぜ我々が成仿吾氏は、このことをあえて隠そうとはしなかったのか？ ほかの主義の信徒と友人を励ますために成先生はこうしなければならなかったようだ。というのは、主義を宣伝するために空話を言っても役に立たず、人格こそ何に比べても力があるからである。

では、成先生はいつたいうわけ、あえて隠そうとはしなかったのか？

実は、これには道理がひとつあったのだ。文人が休養をとる（あるいは療養すること）は、むかしから非常に風流韻事とされておられ、しかも修善寺というあの高級なところへ行ったがゆえである。普通の人が修善寺へ行って泊るのは容易なことではない。だから作品や何か記念をものにするにすぎなく、過してしまふわけにはいかない。この感情が強くなってきてついに一切を忘れてしまった。だからつい知らず知らずに（「修善寺」を）書いてしまったのである。ところでこの情感を何と呼べばよいか？ 私はこれこそ「資産階級（プチブル）の意識」と名づけるべきだと思う。友人たちよ、お分かりだろうか、プチブルの意識というものを？

（中略）

◇ 「ドン魯迅」の由来

これまで『文化批判』を見たことがなかった。だがこの堂々たる名前なら、実際、人を畏怖させるに足る。私はたまたま、中で批判しているのはどんな文化なのかちよつとみようと、不運にも一冊買ってしまった。ちよつとこの一号がドン魯迅（瑞魯迅）の特集号であった。それは「魯迅批判」と言ってもよい。お笑いなのは、魯迅が気ままに書いた雑感文が、彼らによって文化とされ、しかも批判を加えている。文化批判を完成させようというのだ。さらに編輯後尾を見ると、「克服」の文章であり、これらの文章は批判だけにとどまらず、「克服」までしなくてはならない。だからこの『文化批判』という名前は、『文化克服』と変えてもよい。

さて我々は、これらの克服の文章が何を論じているか見てみよう。署名李初梨は、「われら中国の Don Quixote の乱舞を」覧なさい」を書いた。文中で瑞字を魯迅の頭の上にかぶせて「ドン魯迅」（瑞魯迅）という一句を作っている。なぜ瑞字を魯迅の頭の上にかぶせてはならないのか？ これには、語ることができない神秘的道理がある。もう一度彼らの新辞源を見ると、虚無主義同様の Don Quixote のひとつの解釈もある。彼らは言う。スペインで四百年前のセルヴァンテスはドンキホーテをひとつの caricature として書いた。それから四百年後の中国の魯迅は似たところがある。よつて瑞という帽子を魯迅の頭にかぶせたのである。こういう論理は、唯物的論的弁証法、弁証法的唯物物を読んだことがない我々にとっては、どうしても訳が分からない理解できないことだ。（中略）

李君の文に、甘人君に向つて、魯迅は第何階級であるか、しつこく聞くくだりがある。文学の論争といかなる関係があるのか？ これはおそらく、自称革命文学家ならではの態度である。

さらに彭先生の大作「魯迅を取り除くを取り除く（除掉魯迅的除掉）」があり、その Aufheben をなぜ奥伏赫変と訳さなくてはならないかについて説明している。おまけに哲学の中で最も頭を苦しめるところのヘーゲルまで登場させ、また証明するに、なにかマルクス

とかなんとかの主義を持ち出し、我々のような主義を分らない人々の頭をくらくら混乱させ何が何だか分からなくしている。同時に、彭先生の博学に対して敬服せざるを得ない大作なのである。

ただし Aufheben は音訳でなければならぬ理由は成立できない。

どんなふうに通つても Aufheben は、なにか肯定を経て、否定、否定の否定、しかるのちまた肯定などなど。アウフヘーベン奥伏赫変に何か理解不能な哲学が存在するとどんなに主張しようとも、我々はやはりどうしてもあなたの方に聞きたい。アウフヘーベンがみな無数の曲折を経て出てきたものなのか？ ここで一例を挙げてみよう。

自己のプチブル根性を克服し、あの間もなくアウフヘーベンされる階級に君の背を向けて。進みたまえ、あのあくせく働く農工大衆に向つて。(成仿吾の「文学革命から革命文学へ」の一段)

我々はちよつと尋ねる、このアウフヘーベンにどんなヘーゲルの哲学があるのか、と。何か肯定を経て、否定、否定の否定……先生がたよ、私たちは具体的ことごとについて論じようというのだ。我々を脅かさないでくれ。ヘーゲルを持ち出すなんて、頭が痛くなるわけだ。

『文化批判』に克服の文章がある以外に、『創造月刊』第十一期にも一篇がある。作者署名は石厚生である。中にこういう一段がある。

聞くところによると、魯迅は最近、社会科学の本をたくさん買っているそうだ。そうだとすると直ちにまた少なからざる問題がある。彼は本当に社会科学の忠実な学徒になろうとしているのか？ それともただ色を塗って、自己の没落を粉飾しているだけなのか？ この後者の道は、耳をおおって鈴を盗む行為のようなもので、ますます深く、ますます救いがたい没落である。

革命文学の専売権はすでに天下に広く知られている。彼らの革命文学とは、「びっこを引く追隨者」で、彼らの革命文学は先鋒であり、時代の精神である。いまやなんと社会科学の書物さえ他人には

読ませないつもりのようなのだ。他人が社会科学の本を読むと、「ただ色を塗って、自己の没落を粉飾している」と言う。ただ彼らだけが社会科学の本を読んでこそ、本当に忠実な信徒なのだ！

成仿吾はこういう論争(ほとんどケンカに近い。)の渦中にいたが、ある日とつぜん上海を離れて欧州へ向う。その途中、日本に入り、市川市に住む郭沫若と会う。(おそらく、郭沫若に会うために日本に来た。)『戦旗』の山田清三郎によれば一九二八年四月には日本へ来ていた。

## 文献

成仿吾の著作

「革命文学与他的永遠性」『創造月刊』第一卷第四期

一九二六年六月

「完成我們的文学革命」『洪水』半月刊 第三卷第二十五期

一九二七年一月(『成仿吾文集』山東大学出版社 一九八五)

「打倒低級的趣味」『洪水』半月刊 第三卷二十六期

一九二七年二月(『成仿吾文集』)

「文学家与個人主義」(一九二七年九月脱稿)

『洪水』半月刊 第三卷三十四期 一九二七年九月

『文化批判』創刊祝詞『文化批判』創刊号 一九二八年一月

(上海文藝出版社第二次影印 一九八八)

「革命文学的展望」『我們月刊』創刊号 一九二八年五月

「文学革命から革命文学へ」『創造月刊』第一卷九期

一九二八年二月(一九二七年十一月脱稿、於修善寺)

「全部的批判之必要、如何纔能轉換方向的考察」

『創造月刊』第一卷第十期 一九二八年三月

「畢竟是「醉眼陶然」罷了」、「編輯後記」、

『創造月刊』第一卷十一期 一九二八年五月  
史若平編『成仿吾研究資料』湖南文芸出版社 一九八八

(再版 知識產權出版社二〇一一)

成仿吾「与蘇聯研究生彼德羅夫關於創造社等問題的談話」(一九五九年九月)、季刊『新文學史料』一九八五年第二期 人民文學出版社(『成仿吾文集』收錄)

宋彬玉、張傲卉「成仿吾和創造社」(成仿吾談話記錄 1980.9, 1980.10, 1981.7, 1984.3。〈李初梨談話記錄〉1980.10, 1980.12。馮乃超〈魯迅与創造社〉)、季刊『新文學史料』一九八五年第二期 人民文學出版社

陳瓊芝「關於成仿吾同志的『紀念魯迅』」(一九八一年四月)

『魯迅研究文叢』第三輯 湖南人民出版社 一九八一

馮乃超「芸術与社会生活」「文化批判」創刊号 一九二八年一月  
(上海文藝出版社第二次影印 一九八八)

張資平「讀『創造社』、饒鴻競等編『創造社資料』」(下)

福建人民出版社 一九八五

伊藤虎丸編『創造社資料』全十冊

『洪水』半月刊、『創造月刊』ほか)アジア出版 一九七九

復印『創造月刊』全三冊 上海書店 一九八五

小谷一郎『創造社研究・創造社と日本』汲古書院 二〇一三  
中井政喜『一九二〇年代中国文芸批評論』汲古書院 二〇〇五  
魯迅『三閑集』(竹内好訳)『魯迅文集』第五卷

筑摩書房 一九七八

魯迅「酔眼中的朦朧」「語絲」第四卷十一期 一九二八年三月(竹内

好訳『魯迅文集』第四卷 筑摩書房一九七七)

魯迅「上海文芸之一瞥」(一九三一年七月)、「硬訳」与「文學的階級性」(一九三〇年三月)、『二心集』(『魯迅全集』人民文學出版社第四卷 一九八一)

魯迅「革命時代の文學」、「革命文學」、「文學と革命」、「三閑集序言」、「酔眼中的朦朧」、「文學の階級性」『魯迅全集』(5)學習研究社 一九八五

魯迅「二心集」『魯迅全集』(6)學習研究社 一九八五

魯迅著、松枝茂夫訳『朝花夕拾』「小引」(一九二七年五月広州)「解説」岩波文庫 一九五五年第一刷

李初梨「請看我們中国的 Don Quixote 的乱舞・答魯迅「酔眼中的朦朧」」『文化批判』第四号 一九二八年四月(上海文藝出版社第二次影印一九八八)

彭康「除掉」魯迅的「除掉」『文化批判』第四号 一九二八年四月  
(上海文藝出版社第二次影印 一九八八)

侍桁「又是個 Don Quixote 的乱舞」『北新』半月刊 第二卷十五号  
一九二八年六月(『成仿吾研究資料』收錄)

## 郭沫若の院士当選原始檔案に関する考証

沈衛威著／藤田莉那訳

中国現代文学において、五四運動期の三詩人胡適、郭沫若、傅斯年は1948年第一回目の院士選挙でそれぞれ中国文学、考古学、歴史学の三学科で当選し、院士となった。国民党政権に対抗する郭沫若が、国民政府初回院士に当選したのは、当時の学界においては一大事件である。院士選挙の過程については、すでに若干先行論文が存在する。筆者も以前、この件に関係する論文で『胡適日記』『夏鼐日記』『傅斯年手札』に基づき論を試みた。新たに発見された原始檔案文献―最初の推薦の段階で、胡適、梅貽琦、傅斯年及び河南大学、合わせて四つの推薦票によって、郭沫若が小選挙グループで一位となる。この事実は郭沫若の当選が一大事件となるということの最も確実な根拠となる。討論、投票という重要な場面において、胡適はまた責任感をもって議事進行を進め、郭沫若を、彼自身が知らない民国学术界において順調に「国立中央研究院」院士に選出したのである。本論文は原始資料である正確な官方檔案文献を基本事実として、更に当事者たちの日記、書信という二重の根拠を用い、同時にいくつかの興奮を覚える点を捉え、現場の人間模様も含め、細部にわたり「純学術的」と「学術の立場を重んじる」初回院士選挙の場面の再現を試みる。更に百年来の「徳先生」（民主）と「賽先生」（科学）の五四精神を反芻し弘揚したいと考える。

### 一、動議から推薦へ

中国第二歴史檔案館三九三-1085 「中央研究院辦理第一次院士選

挙経過情形節略」及び「中央研究院京滬評議員談話会記録」には、中央研究院第二回評議會第三次年会は1946年10月20日から22日まで、南京で開かれたことが記載されている。今次年会の一つの重点は、中国に院士制度を作るという斬新な話題がもたらがったことである。これは中国院士制度史上最も重要な会議であり、また戦後中国の科学研究が回復し、新しい姿で未来に一步を踏み出した大きなできごとである。

1947年国民政府は、中国に院士制度を正式に創設し、中央研究院主導のもとで第一回中央研究院の院士選挙を行う決定をした。当時北京大学学長である胡適は政府の要請を受け、3月15日に南京に赴き、中研院評議會談話会に参加し、中研院院士選挙法草案について具体的に討論した。このことは今後の運営と学術に関係しているので、参加者はみなたいへん慎重であった。席上で、二名の評議員、前廈門大学学長、当時中央研究院総幹事兼物理研究所所長薩本棟と歴史語言研究所（以下簡稱「史語所」）所長傅斯年は評議會の委託を受けて、各々制作した選挙草案（国立中央研究院院士選挙規程草案）を提出し、評議會で討論した。薩、傅二人はそれぞれ数理生物、人文社会二大学科分野を代表している。各々学術背景と学科優勢を有している。「選挙規程草案」の制作はたいへん重要で、提案者の立場や思想は後日の実際の選挙に影響を及ぼすことが充分にありえる。15日の談話会で話し合った結果、「胡適、翁文灝、薩本棟、傅斯年、茅以升、吳有訓、李齊七評議員を推挙して、彼らによって慎重に草案を練った後、薩本棟の招集により3月26日に談話会で审查することにした。」<sup>17</sup>。七人中、胡、傅、李は人文学科分野で子弟連盟であり、更に一つの学術研究共同体と学術利益共同体にある。特に胡、傅は特別な師弟関係であるので直接人文学科院士の評議、選出に影響し、左右する。つまり、規定は人為によるし、執行過程も人為によるのである。発言者は最も重要である。

17日、中央研究院院士評議會談話会は第二回の会合を開き、引き続き「院士」選挙法について話し合った。永年中央研究院で仕事し、

総幹事で史語所所長傅斯年是第二草案を起案し、会議に受け入れられた。この草案を次の討論の基礎に据えた。次に第一回院士選挙の正式準備段階に入る。評議員選定、院士候補者を決め、「国立中央研究院院士選挙規程」を批准した。

余又蔭が記録整理した「七評議員起草院士選挙規程小組会記録」によると、傅斯年が提案した案は、3月17日午後の討論において、数理、生物及び人文の三組分科及び各科の人数分配について「討論甚詳」（たいへん詳しく討論した）。数理、生物両科に制限を設けず。

「人文組中国文学一科は文学の学風をリードする者、経籍を精研する者に限る。文藝創作者は含まれないの一点について賛同を得た」〔2〕。仮の各科人数分配においては、中国文学は五人（最少三人、最多六人と注記）〔3〕。人文組で中国文学、言語学、史学、哲学、考古及び美術史、政治学、経済学、社会学、法学、教育学、人文地理学、民族学の十二学科中人数が最多となる。これは後に呉稚暉、張元濟が人文哲学、中国文学二科で推薦、当選の運びになる重要な根拠となる。

七人の評議員によって作成された「国立中央研究院院士選挙規程」は3月26日の「京滬評議員談話会」で修正され、通過した。規程は五章十七条から成る。総則、推薦、院士候補者資格審査、院士選挙、附則に分かれる〔4〕。

この日の評議員談話会で確定した「本院院士第一回選挙」〔5〕総額が少なくとも八十一人とするという原則はその後確実に執行された。この選挙規程は院士の選挙資格について明確な規定を定めた。その内の二項は極めて重要であり、「學術機構の長」が院士に当選される根拠となった。

其の一、専門とする学問領域において特殊な著作、發明或いは貢獻をした者。

其の二、學術機構の長或いは主持を五年以上在任し、卓越な業績を有する者。

上述の選挙法が定められた後、直ちに院士の人選に入った。国立中央研究院が定めた「国立中央研究院第一回院士選挙筹备会通告」は5月12日に国内各新聞社に通達し、連続三日間掲載すること指示した。その主な内容は次の通りである。

第一回選挙の院士は八十人から一百人とし、数理、生物及び人文の三組に分かれる。各大学、各独立学院、各業績を有する専門学会或いは研究機関より院士候補者を推薦すること。ここに通告する。本院第一回院士候補者の推薦期間は新聞掲載の日より三十六年七月二十日までとする。〔6〕

1947年8月20日まで（当初は7月20日まで。「国立中央研究院第一回院士選挙筹备会通告」で、「抗日戦争中推薦された者の著書は多く散逸し、収集に頗る時間がかかるので、締め切り期限を延長してほしいという要望が多かったため」、特別に期間を8月20日まで延長した。このため推薦申請の時日が一か月延長された。またそのため二通りの推薦統計表が存在する。）全国各大学及び多くの科院、科研院所から五百十の有効院士候補者が推薦された。筹备会は申告の要求に基づき、一審で四百二人が通過した。順調に10月15日の第四回評議会に提出された。

前後二通りの推薦者数統計表は分類が異なっている。第一通…中国第二歴史档案館三九三・1597「中央研究院第一次院士選挙人提名册、大学指名統計表、中央研究院院士被提名人姓名编号对照表」では、大学、独立学院、専門学会研究機構別に分類し、分類番号は全て408号である。中央研究院は最後に配列されている。第408号である。

第二通…中国第二歴史档案館三九三・1599「中央研究院第一次院士選挙人提名機構統計表、院士提名科別编号细目」では、大学、独立学院、専門学会研究機構、其の他推薦別に分類し、類番号は全て509号である。「自提」（自選）は最後の第509号になる。その内、中央研究院内各研究所別に、史語所は第410号、中央研究院院部は第419

号になる。

三九三・1597「中央研究院第一次院士選舉人提名冊、大學提名統計表、中央研究院院士被提名人姓名編號對照表」、三九三・1598(4)「中央研究院第一次院士選舉提名表格」によると、大学からの推薦者は五百三十五人である。前六位に連なるのが国立清華大学百三十四人（もう一通三九三・1599「中央研究院第一次院士選舉人提名機構統計表、院士提名科別編号細目」では、推薦者は百三十六人）、国立北京大学は百十九人、国立武漢大学は九十九人、国立中央大学は三十七人、国立河南大学は二十八人（もう一通三九三・1599 提名表統計は十三人）、私立金陵大学は二十七人である。

機関推薦は二百三人、前三位に連ねるのは中央研究院の百五十五人、中央地質調査所の二十六人、国立北平研究院の十二人である。独立学院推薦者は三十人である。専門学会推薦者は七十五人（もう一通の推薦統計は七十三人）。

この中で郭沫若が推薦されたことは、政党政治を超え、学術のみ重視する好例である。

档案文献から明らかのように、選挙規程の作成から候補者推薦及び投票表決までの全過程において、胡適、傅斯年是事実上人文学科の人選を左右する立場にあった。胡適は北京大学学長、今回院士選挙「人文組」の召集人として当然ながら大きな発言権があった。「中国文学」学科の推薦基準は、純文学創作の作家は推薦しない。言語学研究の専門家のみが対象となる。「言語学」学科から推薦されたのは全て現代語学に通暁する古代漢語研究の専門家である。例えば、趙元任、李方桂、羅常培、王力、黎錦熙、張公輝。「哲学類」の推薦基準は、形而上学の玄学を追求する研究者を推薦しない。実証研究の哲学史家が対象となる。例えば、湯用彤、金岳霖、鄧以蜚、馮友蘭、陳康、嵇文甫、徐光榮、羅倬漢、倪青原、郭中一。

人文組中国文学、外国文学では、沈兼士、楊樹達、張元濟、余嘉錫、吳敬恒（稚暉）、胡適、朱光潛、劉文典、李笠、梁調甫、石永楙、唐蘭、余上沅、羅根澤、戴傳賢、朱自清、沈尹默、容庚、古劍生、

趙景深、鄧業建、吳宓、郭紹虞、呂湘、劉永濟、劉賡、袁昌英、樓光來、張志超、羅正暉、陳竹君、焦菊隱、梁実秋、蔣復璁、羅倬漢、傅抱石、黃若舟、吳金鼎、徐鴻宝、徐中舒、鄧以蜚、方東美、潘天寿等文学、絵画の教授が推薦された。また「考古及び芸術史」候補者部類も設立されたが、外国文学と中国、西洋絵画研究の教授は一人も当選されなかった。芸術史の当選者もいなかった。ただ梁思成の建築史研究は芸術と多少重なるところがあるが、ほとんどが建築学に近い。

胡適が北京大学学長として、当時自由職業の郭沫若を推薦したのは、郭沫若の甲骨文、上古史研究の業績を重視したからである。このことは、詩人郭沫若が1927年転向後、学術研究の実績によってこの領域の他の研究者を超えることを物語っている。

胡適は5月22日の日記に中央研究院総幹事薩本棟、史語所所长傅斯年に提出した人文学科部分の推薦者人選を記録している。

哲学・吳敬恒、湯用彤、金岳霖  
中国文学・沈兼士、楊樹達、傅增湘  
史学・張元濟、陳垣、陳寅恪、傅斯年  
言語学・趙元任、李方桂、羅常培  
考古学及び芸術史・董作賓、郭沫若、李濟、梁思成  
人文地理 なし  
民族学 なし

彼が詳しくない二つの学科（人文地理、民族学）については推薦をしていない。中研院の档案に、この胡適署名、押印のあるリストが完全な状態で保管されている。[7]【図1】。

傅斯年は胡適の学生で、胡適とは二十年以上緊密な師弟関係を保ってきた。彼ら二人は多くことに関して阿吡の關係で、常に共通の考え方を抱く。傅斯年は1947年6月20日胡適宛の書簡で今回の院士選挙の人選について次のように書いている。

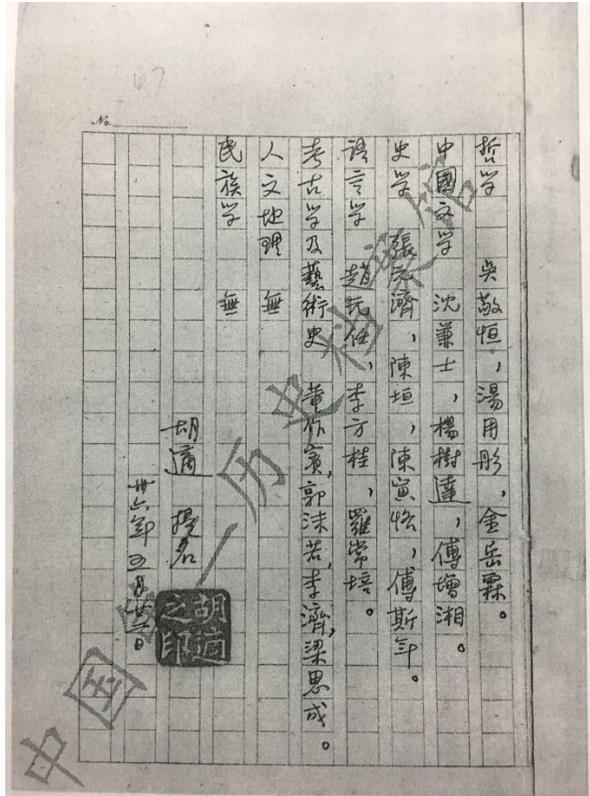


図 1

(中略) 私の考えでは人文方面は二十人を選定する必要がある。振り分けは、

中国文学四、史学六、考古及び美術史四、言語三、哲学三。

考古及び美術史…①李济、②董作宾、③郭沫若、④梁思成。「8」1947年7月17日胡適は院士選挙筹备委員(準備委員)に書簡を出し、彼が署名した「北京大学提出中央研究院院士提名単」(北京大学から提出する中央研究院院士推薦者名簿)を提出した。推薦された候補者は百十九人である。

理数組

数学十人(氏名略)

物理九人(氏名略)

化学十一人(氏名略)

地質学十人(氏名略)

工学四人(氏名略)

生物組

動物学三人(氏名略)

植物学七人(氏名略)

心理学三人(氏名略)

生理学三人(氏名略)

医学十五人(氏名略)

農学七人(氏名略)

人文組

経済系九人(氏名略)

政治学三人(氏名略)

法学三人(氏名略)

哲学二人(氏名略)

歴史学四人(氏名略)

言語学三人(氏名略)

中国文学七人(氏名略)

考古学四人… 李济、董作宾、梁思永、郭沫若

芸術史一人(氏名略)

その後選挙の結果、胡適が推薦した人文組哲学、歴史学、言語学、中国文学、考古学、芸術史六つの学科二十一人中十八人が当選した。

(中略) 四つの学科は全員当選とされた。胡適の学術上の判断と権威が顕著に反映されていると言える。

この百十九人について、胡適が推薦したのに三つの理由がある。

- 一、推薦する必要がある。例えば、北京大学の同人である場合。胡適にとって、学長として院士当選の数は自分の身分に直接関わってくる。更に北京大学の学術地位にも関わってくる。
- 二、積極的に推薦したい。例えば、学界の著名学者、師友、弟子。
- 三、止むを得ず

推薦すること。例えば、唐蘭の場合。特に人に頼まれ、推薦を断れない場合があった。一部の人は推薦用紙に自分が推薦したい人の氏名を記入し、それを持って胡適の所に訪ねて、その場でサインを要求した。この場合はなかなか拒否できなかった。胡適は仕方なくサインし、捺印した。無論、胡適には堅持する原理原則があった。自分が同意した推薦者の氏名をチェックしてから毛筆で署名した。これと対照的に、梅貽琦、周鯨生、朱家驊、李四光、陶孟和、趙太侗、沈宗瀚等多くの大学学長、院長、所長或いは学会会長が推薦した人については、多く署名印を用いた。内選は近い関係を妨げず、胡適は自分の内弟（江冬秀の堂弟）江澤涵を推挙した。また自らも自選した。

郭沫若は「人文組考古芸術史料」においてともに四つの機関に推薦され、順位は第一位である。

档案資料から明らかのように、選挙過程において、郭沫若はそのことを詳らかにしていなかった。彼は「自提」（自選）もしなければ、当事者に自分の個人史料を提供したこともない。純粹に選挙者と評審員の学術行為であった。

推薦したのは清華大学（番号111）、北京大学（番号112）、中央研究院（番号408）、河南大学（番号113）である。董作宾（番号112、113、408）は三つの機関に推薦された。李济（番号112、408）、梁思永（番号112、408）は並んで二つの機関の推薦を得ている。

四つの機関（個人）が郭沫若を推薦した。その順番は、国立清華大学学長梅貽琦（学校番号111）、国立北京大学学長胡適（学校番号112）【図2】、国立中央研究院歴史言語研究所長傅斯年（中研院番号408）、国立河南大学（学校番号113）である。

これらの史料に明らかのように、郭沫若本人が知らない状況下で、すでに国立清華大学学長、国立北京大学学長、国立河南大学と一人の専門研究機関の責任者によって推薦され、その学科順位の第一を獲得したのである。人為的な干渉や政治的圧力も上述四つの最も強

い学術権威に圧倒された。また、当時学者として郭沫若は胡適、梅貽琦、傅斯年、姚從吾から充分の尊重を得ていた。

档案三九三・3100（一）に傅斯年、吳定良、陳寅恪三人署名の提案書「請決定歴史言語研究所今後進行之方針案」（「歴史言語研究所今後の運営の方針承認案」具体的日付なし）がある。そのうち第六項すなわち歴史言語研究所同人学術の遵守が記されている。

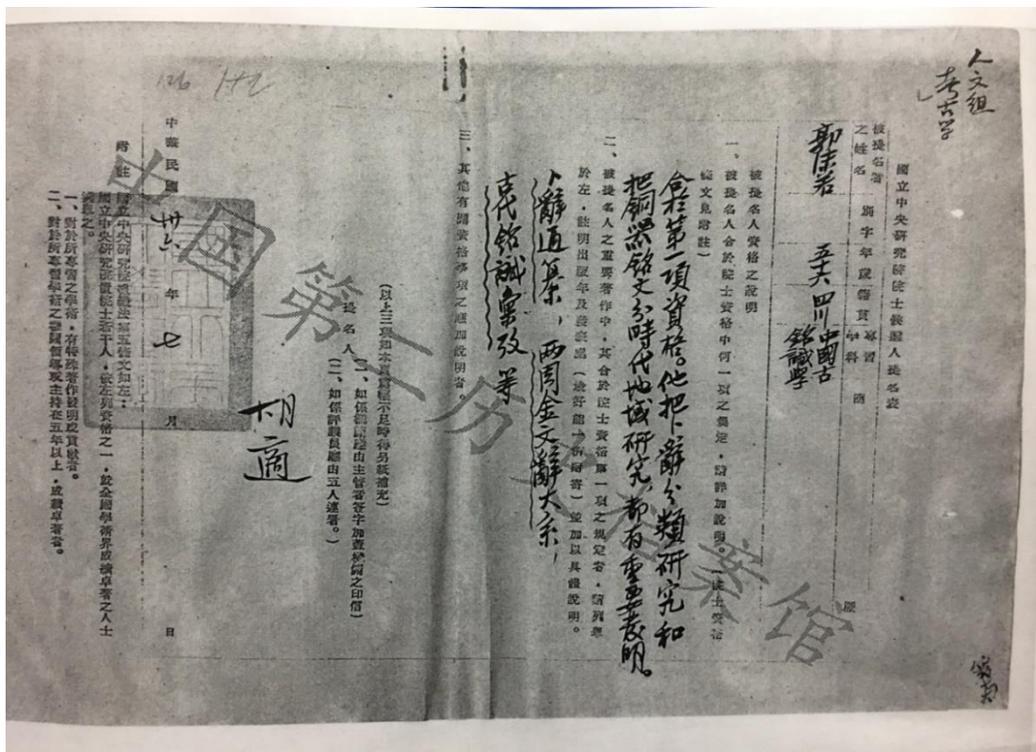
本所（歴史言語研究所）は永久的にその「純学術」立場を保持し、西洋各国の「学院の自由」という原則を遵守し、実際問題を重視することでこれに違反することはしない。〔10〕

これは陳寅恪、傅斯年と歴史言語研究所同人の精神的約束であり、彼らの知行合一の具体的な現れである。

档案資料から明らかのように、選挙過程において、郭沫若はそのことを詳らかにしていなかった。彼は「自提」（自選）もしなければ、当事者に自分の個人史料を提供したこともない。純粹に選挙者と評審員の学術行為であった。

### 一、異なる意見から投票後の選出

胡適は1947年10月13日に南京に到着し、鷓鴣寺で開催された中央研究院院部の院士選挙籌備委員会（準備委員会）に出席した。中国第二歴史档案館三九三・1558「中央研究院評議会第二屆第四次年会記録」によれば、10月15日、中央研究院評議大会は正式に開催された。中央研究院既定の組織法の「評議会条例」により、中央研究院評議会第二屆評議員は「当然評議員」と「聘任評議員」（特任評議員）に分かれる。当然評議員とは当時中央研究院の院長、北平研究院院長、総幹事と各研究所所長である。



当然評議員：

朱家驊、李書華、薩本棟、丁燮林、吳學周、周仁、李四光、趙鈺哲、竺可楨、傅斯年、汪敬熙、陶孟和、王家楨、羅宗洛、趙九章、姜立夫

聘任評議員：

姜立夫、吳有訓、李書華、侯德榜、曾昭抡、莊長恭、凌鴻勳、茅以升、王寵佑、秉志、林可勝、陳楨、戴芳瀾、胡先驌、翁文灝、朱家驊、謝家榮、張雲、呂炯、唐钺、王世杰、何廉、周鯨生、胡適、陳垣、趙元任、李濟、吳定良、陳寅恪、錢崇澍

選挙の必要により、中央研究院評議会当然評議員、聘任評議員と院士選挙準備委員会委員と一緒に審議、選挙に参加する形をとった。これにより「評議会の職権を代行する」という形が出来上がる。

胡適の日記によると、評議会は16日午前に分会審査会を開き、(一)数理組、(二)生物組、(三)人文組に分かれる。胡適は人文組召集人兼組長である。午後全体会を開き、「数理組」と「生物組」の候補者を決定した。胡適は夕方に「人文組」院士資格「合格根拠」をしたため、八時間ばかりで、翌朝四時に完成した。

評議会は17日に引き続き全体会を開き、推薦人が各組の企画した「考語」(評議文)の整理をすることを決定した。全体会で候補者名簿を決定する。慎重な審議により、純粹に學術の造詣を基準に、全会一致で百五十人を第一回院士候補者とするに決定した。

最終的に決定した百五十名の候補者は「数理組」四十九人、「生物組」四十六人、「人文組」五十五人である。名簿はその日の夕方七時に定例会で公開された後中央研究院によって公示された。

国立中央研究院公告

中華民國三十六年十一月十五日

本院第二回評議会第四次大会は、法に基づき第一回院士候補人を定め、数理組四十九人生物組四十六人及び人文組五十五人であることをここに公告する。

数理組四十九人（氏名省略）

生物組四十六人（氏名省略）

人文組五十五人

吳敬恒、金岳霖、陳康、湯用彤、馮友蘭、余嘉錫、胡適、唐蘭、張元濟、楊樹達、劉文典、李劍農、柳詒徵、徐中舒、徐炳昶、陳垣、陳寅恪、陳受頤、傅斯年、蔣廷黻、顧頡剛、王力、李方桂、趙元任、羅常培、李濟、梁思永、郭沫若、董作賓、梁思成、徐鴻宝、王世杰、王寵惠、吳経熊、李浩培、郭雲觀、燕樹棠、周鯁生、張忠絨、張奚若、錢端升、蕭公權、方显廷、何廉、巫宝三、馬寅初、陳総、楊西孟、楊端六、劉大鈞、吳景超、凌純声、陳達、陶孟和、潘光旦（沈按ずるに、通告に、「院士候補人資格の根拠」条目及び考語に合致するという件があるが、ここで省略。）

この時傅斯年が高血圧治療のためアメリカに行っていたので、歴史言語代理所長夏竦は傅斯年に代わって評議会に列席したが、投票権がない。彼は1947年10月17日の日記に当日の表決現場の状況を記している。朱家驊、薩本棟、吳有訓（正之）は現実の政治を考量して、郭沫若の候補者資格に対して反対意見を表明した。巫宝三、陶孟和ははっきりと政治的立場を脱すべきと主張し、郭沫若の当選を支持した。胡適は郭沫若を強く推した。最終表決で、賛成14票対反対7票となり、郭沫若を百五十名の院士候補人名簿に入れることとなった。夏竦は日記に次のように記す。

午前の評議会では引き続き候補者名簿について審議した。郭沫若の推薦について、胡適之氏は主席に、主席の立場を離れてこの件に如何なる意見をもつかと尋ねた。朱家驊氏は言うには、郭沫若が内乱に加わり、漢姦罪などの理由で候補者名簿に入れるべきでない。

薩総幹事は、政府を刺激し、将来経費獲得に影響が出るのではないかと言う。吳正之先生は郭沫若が将来院士の地位を利用して勝手に言論を発表する恐れがあると言う。巫宝三は立ち上がりて反対した。政党の關係によつて彼の学術的貢献に影響を及ぼすべきでないと言つた。陶孟和先生はもし政府の意志を基準にするなら、政府に推薦してもらふしかないと言つた。胡適之先生も学術の立場を主とすべきと言つた。双方が各々意見を發表して、最後は無記名投票を行つた。余は列席者であるので表決権がなく、投票には参加できない。そこで立ちあがり意見を述べた。

會議の中に何人かの人は異なる政党と漢姦とを同一に論じようとしている。しかし中央研究院は *Academia Sinica* 「中国の科学院」である。学術的貢献を除けば唯一の条件は中国人であるということになる。漢姦であればそもそも中国人と言えない。政府に反対するのは漢姦とは異なる。この二つのことは一緒に論じることができない。国民政府以前にはすでに中国が存在する（国民政府が傾覆される後も依然として中国がある）この言葉が言いたくても言つてはいけないと思つて、途中で止めた。故に漢姦には厳しくし、異政者には寛容であるべきと言つた。表決の結果、14票対7票で候補者名簿に入れることが決定された。〔11〕

胡適が支持した「学術の立場を主とする」方針は、上に引用した傅斯年、吳定良、陳寅恪が提案において保持した「純粋学術」の立場と相通するものである。

この時、中研院の行政管理体制の中で、代理院長朱家驊は評議会議長を兼任していた。翁文灝は評議会秘書、薩本棟は総幹事であるが、しかし学術評議会場の実際のな力は自分が投ずる一票のみである。これは学術評議会の核心であり、また個人と組織の学術的内在關係でもある。

教育部部長中央研究院院長朱家驊は党と国家の立場に立つて、郭沫若を「内乱に参加した」と見る。中央研究院総幹事は郭沫若の当

選が「政府を刺激し、将来の経費獲得に影響する」と心配する。中央大学学長呉有訓は郭沫若が「将来院士の地位を利用して勝手に言論を発表する恐れがある」と危惧を抱く。彼らはそれぞれの立場から郭沫若に異なった態度をもっていた。

評議会の状況から明らかのように、大会主席朱家驊と総幹事薩本棟にしても他の評議員の学術立場を左右できず、他の評議員の意見をも代表し、あるいは他人の学術的理念を代弁することができなかった。この場で、中央研究院院長は誰が院士に当選してはいけないというようなことは決められなかった。これはまさに民主制度が学者たちに賦与した学術権利であり、また学術倫理を堅持する学者たちの人格の表れである。

百五十人の院士候補者名簿は11月15日、北平、天津、上海の各新聞と政府公報に掲示された。

公示より四か月後評議員会が第一回の院士選挙を行い、候補者一百五十人より八十から一百人を選出する。各候補者は全出席人数の五分の四の同意票によって当選とする。公示期間においていずれかの候補者に対し、その候補者資格に批判的意見がある場合は、準備会宛に具体的な意見書を提出し、検閲を受けてから評議会に提出し、選挙時討論の参考資料とする。評議会は各人の批評意見を歓迎し、尊重し、公平に扱う。

### 三、郭沫若の当選

1948年3月25、26、27日、評議会会員たちが南京鶏鳴寺に設けられた中央研究院院部において審議、投票を行った。三日間の間一回の基本投票と四回の補選投票、計五回の投票を行った。

26日午前、数理組から四十九名の投票結果を公表した。(氏名略)  
生物組は四十六名候補者中三十三人が最終投票に入る。(氏名略)

[12]

人文組は五十五名候補者から三十三人が最終投票に入る。

哲学四人 吳敬恒、金岳霖、湯用彤、馮友蘭  
文学四人 余嘉錫、胡適、張元濟、楊樹達  
歴史学七人 柳詒徵、徐炳昶、陳垣、陳寅恪、傅斯年、蔣廷黻、顧頡剛

言語学三人 李方桂、趙元任、羅常培  
考古学四人 李濟、梁思永、郭沫若、董作賓  
芸術史一人 梁思成  
法学二人 王世杰、王寵惠  
政治学三人 周鯁生、錢端升、蕭公權  
経済学三人 何廉、馬寅初、陳綏  
社会学三人 陳達、陶孟和 [13]

前三回の投票結果で七十八人が当選とされたが、予定の八十一人に対して三人不足している。3月27日二十四名の評議員が最終投票に参加した。秘書からアメリカにいる中央大学学長、評議員呉有訓の連絡を伝えた。呉は今回の選挙及び被選挙を放棄すると言うのである。第二回補選で人文組では顧頡剛が当選した。第三回補選で人文組余嘉錫が当選した。第四回補選で人文組吳敬恒当選した。最終結果、院士八十一人が選出された。  
選挙結果は28日にメディアで披露された。中央研究院は1948年4月1日に正式に公示した。

### 国立中央研究院公告

卅七年四月一日

本院第二屆評議會第五次大会により合法的に院士を選出した。数理組二十八人、生物組二十五人、人文組二十八人、ここに公示する。

数理組二十八人(人名略)  
生物組二十五人(人名略)  
人文組二十八人

吳敬恒、金岳霖、湯用彤、馮友蘭、余嘉錫、胡適、

張元濟、楊樹達、柳詒徵、陳垣、陳寅恪、傅斯年、

顧頡剛、李方桂、趙元任

李濟、梁思永、郭沫若、董作賓

梁思成、王世杰、王寵惠

周鯁生、錢端升、蕭公權、馬寅初、陳達、陶孟和 [14]

筆者が考えるには、朱家驊、薩本棟、吳有訓の三人はみな理工科出身である。文学科をよく知らない彼らの反対意見は、北京大学学長胡適、清華大学学長梅貽琦、史語所所長傅斯年、河南大学学長姚從吾が高い学術業績によって郭沫若を第一位に推挙した考えを覆し得るはずもないのである。加えるに胡適は人文組の評議長である。

三人の反対意見は情、理ともに通用しない。感情(学者への敬意)、学理、政治という思惑が審議現場を二分した。感情(学者への敬意)、学理がそれぞれ政治的思量に絡んで、14票対7票の結果を生んだ。

これが民国の学術の現場である。政治が介入していたが、学者たちが堅持していた学術の立場と共通に担っていた学術倫理がそれを撃退した。左派の学者として、郭沫若が第一回国民政府の院士に当選された。これは学術の勝利と言えよう。

政党の立場を堅持した評議員は間もなく国民党及び国民政府の大連における敗北に直面する運命に遭遇する。

1948年9月23日国民政府は南京で院士大会を開催したが、郭沫若は出席しなかった。

1949年国民党政権は敗北を喫し、台湾へ撤退した。郭沫若に反対意見を表明した三人のうち、朱家驊は旧政府に従って台湾に行き、薩本棟は病死し、中央大学学長吳有訓は北京の新政府に加わり、中国科学院副院長に着任したが、院長は郭沫若である。郭沫若を推挙した胡適、梅貽琦、傅斯年、姚從吾はみな大陸を離れた。郭沫若にとって、これが人生劇の前半である。胡適、梅貽琦、傅斯年、姚從吾の敬意を蒙った彼はここから古い自分に別れを告げ、新しい自分として政治の舞台に舞い上がる。

## 注釈

- [1] 中国第二歴史檔案館三九三-1034 《中央研究院院士選舉規程及京滬評議員談話會記錄》第12頁。
- [2] 中国第二歴史檔案館三九三-1034 《中央研究院院士選舉規程及京滬評議員談話會記錄》第32頁。
- [3] 中国第二歴史檔案館三九三-1034 《中央研究院院士選舉規程及京滬評議員談話會記錄》第38頁。
- [4] 中国第二歴史檔案館三九三-1034 《中央研究院院士選舉規程及京滬評議員談話會記錄》第63頁。
- [5] 中国第二歴史檔案館三九三(2)-133 《中央研究院院士選舉規程》第12頁。
- [6] 中国第二歴史檔案館三九三-1617 《中央研究院第一次院士選舉提名通告及有関文書》第4頁。
- [7] 中国第二歴史檔案館三九三-1615 《胡適羅宗洛等擬提院士候選人名單案》第37頁。
- [8] 《傅斯年信、电五十六通》，耿云志主編《胡適遺構及秘藏書信》(手稿本)第37册第524-528頁，黄山書社，1994。
- [9] 中国第二歴史檔案館三九三-1613 《東北大学雲南大学等院校函送院士提名表及有関文書》第67-74頁。
- [10] 中国第二歴史檔案館三九三(2)-3010 (1) 《中央研究院第一屆評議會會議記錄及有関文書》第215頁。
- [11] 夏竦·《夏竦日記》(王世民、夏素琴等整理)卷四第150-151頁，華東師範大学出版社，2011。
- [12] 中国第二歴史檔案館三九三-3100 (3) 《中央研究院第二屆評議會會議記錄及報告》第56頁。
- [13] 中国第二歴史檔案館三九三-3100 (3) 《中央研究院第二屆評議會會議記錄及報告》第57頁。
- [14] 耿雲志主編《胡適遺構及秘藏書信》(手稿本)第25册第501頁。中国第二歴史檔案館三九三-2658 《中央研究院公告院士候選人及選定院士名單》第2頁。胡適日記中粘貼的就是二档保存的这份打印件。

## 『沫若自伝』を読む四

### 追い詰められて文学の道へ

—— 与つて力あつた日本の外国語教育

上野恵司

わたくし自身が語学教育に携わっていたせいか、郭が日本で受けた外国語教育がどのようなものであつたかや彼がそれをどう見ていたかには特別に興味がある。以下はこの間の事情を窺わせる回想からの抜き書きである。

一九一四年正月に來日した郭沫若は半年間の受験準備の後、第一高等学校に合格、ここで一年間の予科を終え、岡山の第六高等学校に進学している。

この時の学校生活を振り返つて、郭は当時の日本の高等学校における外国語教育について面白い証言をしている。  
ちよつと長いが原文を引用する。

日本高等学校の功課、有一半乃至以上は学外外国語、有第一外国語、第二外国語。甚至像我们学医的人在第一德语、第二英语之外、还要学第三种的拉丁语。一个礼拜的外国语时间在二十三个钟点以上。加之日本人教外国语的方法是很特别的，他们是特别注重读。教外国语的先生大概都是帝大出身的文学士，本来并不是语言学专家，又于学生们所志愿的学科没有涉历，他们总爱选一些文学上的名著来做课本。上课时的情形也不同，不是先生讲书，是学生讲书。先生只是指名某某学生起来把原书读一节，接着用日本话来翻译。译错了时，或者让别的学生改正，或者由先生自己来改正。接着又指名第二个人读下去，译下去。（2・43）

※以下引用は『沫若自伝』全四卷（人民文学出版社、一九七三年三月）により、巻数と頁数を示す。

（日本の高等学校の授業は、半分ないしそれ以上が外国語を学ぶことであつて、第一外国語と第二外国語とがある。加えてわれわれ医学を志望する者は、第一のドイツ語、第二の英語の外に、第三としてラテン語まで学ばなければならない。一週間の外国語の時間は二十二、三時間以上だつた。そのうえ日本人の外国語教授法は非常に変わつていて、彼らは特に訳読に重点を置く。外国語を教える先生はたいがいみな帝大出身の文学士で、もともと語学の専門家などではなく、また学生の志望している学科について学んだことがあるわけでもない。彼らは決まつて文学上の名著を選んでテキストにした。授業の時の様子も変わつていて、先生が解釈するのではなく、学生が解釈するのである。先生はただ誰その学生を指名して、立つて原書の一節を読ませ、続いて日本語で翻訳させる。訳し違えると、外の学生に訂正させるか、先生自身が自分で訂正する。続いてまた次の学生を指名して読ませ、訳させる。）

「なんだ、僕らの学生の頃と変わらないではないか」と思わず吹き出してしまった。さらに、次の一節。

「指名の方法、有的先生は挨着座次，那倒还可以偷懶，不轮到自己名下时可以不必准备。但有的先生全是任意，没有一定的。因此学生的自修时间差不多就是翻字典。」（2・43）

（指名の方法は、先生によつては番号順であり、その場合はまだ怠けることができる。自分の番が回つてくるまでは、予習して行かなくてもかまわないわけだから。しかし先生によつては、まったくの行き当たりばったりで、決まつたルールがない。だから学生の自習時間はほとんど辞書を繰る時間である。）

吹き出すどころか、腹を抱えてしまった。郭が六高に在籍したのは一九一五年からの三年間であるから大正の初期、わたくしの高校、大学時代は昭和の三〇年代であるからおよそ半世紀近い隔たりがあるが、英語にしてもドイツ語にしてもほとんど変わりが無い。

もつとも、わたくしたちの時代からさらに半世紀を経た今日ではすっかり様変わりして、大学入試の英語は「読む、聞く、話す、書く」をまんべんなく評価するとかで、高等学校の教室ももうのんびりと文学作品の講読などしていらなくなってしまった。

大学もしかり。つい先日、大学の後輩で英文学を専攻して、今は東京のある理系の大学で英語を教えている友人の某君からこんなグチを聞かされた。今年の春、学生の教養のたしにと、ラムの『シェイクスピア物語』を講読しようとしたところ、学部長から「文学はもういいから、論文の書き方を指導してもらえないか」と注文があったというのである。今触れておかなければ生涯無縁のまま終わるかもしれない文学の楽しみを味わわせてやりたかったのにと、おおいに不満の様子である。

先の引用中にも触れられているが、外国語の学習に文学作品を講読するという習慣は郭沫若の時代も変わりがなかったようだ。

准备学医の人、第一外国語は德语。日本人教語学の先生又多是文学士、用的书大多是外国の文学名著。例如我们在高等学校第三年级上所读的德文便是歌德的自叙传《创作与真实》(《Dichtungs und Wahrheit》)、梅里克(Mirike)的小说《向卜拉格旅行途上の穆查特》(《Mozart auf Reise nach Prague》)。这些语学功课的副作用又把我用力克服的文学倾向助长了起来。我和德国文学、特别是歌德和海涅等的诗歌接近了，便是在这个时期。

[2・57~58]

(医学志望の者は、第一外国語はドイツ語であった。日本人の語学の先生はたいいが文学士で、テキストは多くが外国の文

学名著であった。例えば、私たちが高等学校の三年生の時に習ったドイツ語は、ゲーテの自叙伝『詩と真実』、メーリケの小説『プラーグへの旅の日のモーツァルト』であった。これらの語学の授業の副作用として、私が懸命に克服しようとしていた文学への傾斜をまた助長しはじめた。私がドイツ文学、とくにゲーテやハイネ等の詩歌に接近したのは、この時期のことである。

両耳が難聴で、医学、特に臨床医学をきちんと学ぶことは不可能であると思ひ定めた郭は、苦悶の末、追い詰められて文学への道を歩むことになる。

到了日本虽然把文学抛弃了，但日本人教外国语，无论是英语、德语，都喜欢用文学作品来做读本。因此，在高等学校的期间，便不期然而然地与欧美文学发生了关系。我接近了太戈尔、雪莱、莎士比亚、海涅、歌德、席勒，更间接地和北欧文学、法国文学、俄国文学，都得到接近的机会。这些便在我的文学基底上种下了根，因而不知不觉地便发出了枝干来，终究把无法长成的医学嫩芽掩盖了。 [2・12]

(日本に到着すると文学を放棄してしまったが、日本人は外国語を教えるのに、英語にせよ、ドイツ語にせよ、みな文学作品をよくテキストに使った。このため、高等学校在学中に、期せずして欧米文学と関係を持つに至った。私はタゴール、シェリー、シェイクスピア、ハイネ、ゲーテ、シラーに接近し、より間接的ながら北欧文学、フランス文学、ロシア文学にも接近する機会を得た。これらが私の文学の基礎の上に根を下ろし、そのために、知らず知らずのうちに幹となり枝葉が生じて、とうとう成長しようのなかつた医学の若い芽を覆ってしまったのである。)

2018年度日本現代中国学会全国学術大会・文学分科会

## 《郭沫若研究の現在―郭沫若逝去四〇周年、文学活動開始

### ―一〇〇周年にあたって― 報告要旨

2018年10月20日、21日の二日間、早稲田大学戸山キャンパスで第68回全国学術大会が開催された。21日午後、当会は文学分科会で「郭沫若研究の現在」をテーマに、企画分科会を開催した。

はじめに座長（岩佐昌暲会員）の趣旨説明（「郭沫若逝去四〇周年、文学活動開始一〇〇周年にあたり、日本における郭沫若研究を振り返り、現状を整理し、課題を明らかにし、研究の新たな展開をめざしたい」）があり、武継平（『女神』と五四の時代精神との関係性）／瀬戸宏（郭沫若戯曲の今日的意義）／藤田梨那（亡命期郭沫若と日本の雑誌社との関係）の各会員が報告、最後に坂井洋史会員が「討論」を行った。分科会は約三十五名が参加、盛会裏に閉会した。開会前には、控室で会員懇談会をもった。分科会の概要については、学会ホームページ <http://www.genchugakakai.com/archive.html>「現代中国学会ニュースレター」56号に書いた。本号では、当日の報告・討論の要旨を掲載する。なお、藤田梨那会員の報告要旨は当日配布のレジユメに基づいて編集部でまとめた。

\*\*\*\*\*

### 『女神』と五四の時代精神との関係性

武 継平

『女神』と五四の時代精神の関係性をめぐる研究は、中国現代文学研究の中で最も重要視されてきた部分だと言っても過言ではない。

しかし、従来この面における研究は、創作の意図や出版の動機などに関して事実関係の裏付けがほとんどなく、作者が後年に書いた自伝などを根拠に推測または想像されてきた。聞一多の詩論『《女神》之時代精神』（『創造週報』第4号、1923・6・3）を皮切りに、以来『女神』の創作と時代精神との関連付けが当然のこととなり、そしてそれがますますエスカレートして、『女神』が「五四時代の必要に応じて書かれ」、「時代精神を謳歌」し、しかも作者「郭沫若がまさに五四期の時代精神の表現者である」という認識が『女神』研究の定説となつたのである。

本報告は、このような主観的な関連付けに一石を投じ、『女神』研究を原作者の主体意識から切り離して行うべきではないと指摘した一方、個々の詩作時の郭沫若の生活実態に目をつけ、彼の生きざま、人生観、恋愛観などを裏付ける『三葉集』や『女神』出版前後に作者が披露した創作動機などの史料を根拠に、作品の背後に見え隠れする作者の「主体意識」の変化を捉えつつ、詩作が個別に『時事新報・学燈』に発表された時点で作者が言及した創作意図がそれらの作品の持つ「真の主体意識」であり、『女神』が詩集として出版され、特に詩集の「序詩」に反映される「動機」は個の「主体性」を讀者と共有したい願望にすぎず、もはや作品の「創作意図」としてみるのは妥当ではない、と従来の研究に異を唱えた。

さらに、本報告では詩集『女神』に関して、作品には明らかに異なる二つの創作期があることを取り上げ、1919年秋〜1920年夏まではいわゆる「第一次創作意欲の猛烈襲来」期で、郭沫若は「精神の苦悶」を詩で表現し、『鳳凰涅槃』や『天狗』のような「鴻荒を開闢する大いなる自我」を表現する「スケールが大きい詩」を書きあげた。その時期の「精神の苦悶」とは結婚や男女愛に関する旧い人倫道徳に抑圧された心の葛藤である。従来それらの「スケールが大きい詩」群が「五四時代の必要に応じて書かれ」、「時代精神を謳歌」したと見られてきたのだが、作者の創作意図と結び付けられる要素は確認できない。

## 郭沫若戯曲の今日的意義—『蔡文姬』を中心に

一方、『女神』創作期の郭沫若の精神生活を丹念に調べていくと、『鳳凰涅槃』や『天狗』のようなエネルギーに満ち溢れる「大いなる詩」こそ、作者が自分自身の過去を否定し斬新な自分に生まれ変わるという内心の苦悶や葛藤を表現した作品だと判明する。「五四時代」や「祖国」などを意識して書かれたものではない。祖国を思う詩作『炉中煤—眷念祖国的情緒』（1920年2月作）はあるが、抒情詩として遊子のノスタルジア以上の感動は伝わってこないほか、五四という特定の時代と結びつける要素も見当たらない。

本報告では、『女神』創作期に書かれた作品にはやや異なる傾向性を示すものが二つ見られると考える。その一つは「新旧自我の葛藤」、つまり今までの生き方を否定し生まれ変わりたいという個人の精神世界の命題で、もう一つは抽象的な「暗黒と光明の対決」だ。『立在地球边上放号』、『電火光中』、『光海』、『太陽礼賛』は後者の類に入るが、博多湾の自然からエネルギーを吸収し、自分に勇気をつけ、暗い過去に別れを告げようとする姿勢は『鳳凰涅槃』や『天狗』などで見られる「新旧自我の葛藤」と同質の性格を有する。

ところが、1921年1月に書かれた戯曲『女神之再生』にはそれまでの詩想と大きく異なる要素が現れた。これこそ以前にない国家や現実社会への関心と風刺だが、明らかにここから個の内面から社会への飛躍が見られるようになった。

『女神』の「第一次創作欲の猛烈襲来期」は1919年9月から1920年夏までだと郭本人が言っている。その間神がかりに近い状態で湧き出る詩を書きつづけていたが、その創作動機には「時代精神を表現する」要素は特にない。その後『鳳凰涅槃』や『天狗』、『太陽礼賛』のようなスケールが大きい作品がもはや書けなくなっただが、それまでに新聞などで発表した詩作をまとめて詩集『女神』として出版する1921年8月までの間、郭沫若は精神面では著しく成長し、文学者としての目線も自分の内面から世の中へと変わり、この時点で書かれた『序詩』にはそれまでにない階級意識が現れたのである。

## 1. CNKI からみる中国での郭沫若研究情況

日本では近年郭沫若は研究の主要な対象ではない、という意見が強い。これは論文数などから論証できる。中国でもそうなのだろうか。この疑問を解くのに最も確実な方法は、国家事業の学術データベース CNKI (中国知網) で関連論文数を確認することである。

他の作家も含めて、民国期の作家研究論文数（その作家の氏名を標題に含む論文数）を調べると、下記のようになる。  
魯迅三五三九条、郭沫若九七四四条、張愛玲六四二二条、胡適五六七二条、沈從文五五五八条、老舍四三三五五条、茅盾三九二三条、巴金三二五三三條、曹禺三二〇六条、蕭紅二七二五條。

以上が論文数上位一〇位の作家である。一位以下や近年の作家も調査し学会では報告したが、ここでは紙幅の都合で省略する。これは、二〇一八年一〇月一七日の調査である。(CNKIは調査日時によって検索される論文数などが異なることがあり、二〇一九年五月三日では郭沫若は九〇六八条だったが、他の作家も低めの数字が出ており、全体の傾向は変わらない。)

日本と異なり研究論文発表数からみると、郭沫若は現代文学作家として魯迅に次いで第二位であることがわかる。発表時期でみると、改革開放期以前は学術誌の数も少なく CNKI に収録されていない雑誌もあり、単純な比較はできないが、改革開放以前の郭沫若関連論文は毎年数点、一九七八年〜一九八四年は数十点、一九八五年以降は毎年百数十点以上（二百数十点の年も多い）であり、むしろ改革開放以降に関心が強まっていることがわかる。CNKI は研究論文のおおまかな内容別区分もわかり、郭沫若の場合は高い関心の理由に、中国現代史や歴史学・考古学研究など文学芸術以外の要素があることは否定できない。しかし九七四四條、第二位という数字は、文学芸術面でも郭沫若は中国国内でなお相当な関心を持たれている

ことを示していよう。

## 2. 郭沫若作品の中で『蔡文姬』の占める位置

作品で『蔡文姬』の主題別分類にあがるのは『屈原』のみで、それも中国の研究者によれば、抗戦期重慶での上演という政治意義に焦点があてられがちであった。

しかし、実際の上演という面からみると別の傾向が浮かび上がってくる。特に文革終結以後今日までの約四〇年間、郭沫若戯曲で上演されているのはほぼ『蔡文姬』のみなのである。『虎符』なども上演されているが、『蔡文姬』には大きく劣っている。研究論文で大きく取り上げられる『屈原』は、文革後はまったく上演されない。

では、『蔡文姬』は郭沫若戯曲の中で最も優れた作品なのだろうか。そうではない。中島みどり『蔡文姬』論（『傾筐集』二〇一一年、朋友書店）は、『蔡文姬』の文学作品としての弱点を、「我々は主として作家のモチーフ、或いは作品のテーマが、人物形象を大きく決定しているのを見るのである。（中略）文姬と曹操の再評価をするためだけならば、正確でわかりやすい論文か、もう少し親しみやすい解説文を書けばよい。」と鋭く分析している。『蔡文姬』は、作者の観念から出発し、登場人物の形象は作者の観念のロボットだ、ということである。私も、本誌第四号掲載「郭沫若『蔡文姬』と北京人民芸術劇院」で、『蔡文姬』の同様の問題点を指摘した。

それでは、なぜ『蔡文姬』は繰り返し上演されるのだろうか。『蔡文姬』は北京人民芸術劇院で一九五九年に初演されているが、その演出を担当した焦菊隱の功績を見なければならぬ。『蔡文姬』はこの時期の焦菊隱が追求した話劇の民族化探求の代表作であり、北京人芸の芸術風格形成に大きく寄与したとされているのである。戯曲（劇文学）としてかなり大きな弱点を抱え、他の郭沫若戯曲に比べて際立って文学的に優れているわけではない『蔡文姬』が今日まで上演され続けているのは、焦菊隱演出の力によるころが大きいといつてよい。

この事実から、こうも言えるだろう。『蔡文姬』が、演出の力によ

つて二一世紀の今日まで舞台上で生命を保ち続けているなら、他の郭沫若作品も新たな演出家・俳優によって新たな生命を吹き込まれる可能性は十分にあるのではなからうか。

\*\*\*\*\*

## 亡命期郭沫若と日本の雑誌社との関係

藤田梨那

郭沫若は日本亡命期（一九二八―三七）官憲の監視下にあつて、政治的言論と発表の自由を失い、古代社会研究、文字研究、身边小説の執筆に力を集中せざるを得なかった。この期間、かれの文章や作品を掲載した雑誌は、『中央公論』『改造』はじめ少なくない。大会では白揚社の『歴史科学』、医学者団体・同仁会の『同仁』、日本評論社の『日本評論』を中心に、これらの雑誌と郭沫若との関係、彼の作品の内容や、それが与えた影響を紹介した。

白揚社は左翼出版社で、郭沫若は同社から『中国古代社会研究』を刊行した。『歴史科学』は日中の専門家による賛否両論の書評を掲載、郭の古代社会論が日本の歴史学会に一石を投じたことを示した。同誌はまた、郭の歴史小品などを発表している。

同仁会は古くから中国と医学上の関係を結んできた団体。『同仁』には陶晶孫、郁達夫ら現代文学の翻訳が掲載されたが、郭沫若は十作品が訳され、彼を批評する文も六編載っている。

日本評論社は三〇年代から第二次大戦にかけて社会問題を重視、プロレタリア派の色彩を強めた。郭沫若帰国後の日中戦争期にも彼の評論を掲載し、また彼についての日本人の評論も載せた。

日中関係が最も緊張していた時代にも、ファシズムに反対し、郭沫若を支援する知識人、雑誌社があり、その助けによって郭沫若が文章と作品を発表できたことが分かる。亡命期の郭沫若に関してはまだ研究すべき多くの課題が残っている。

「某々研究の現在」という総括は、制度化した学術研究の慣例で、その趣旨は、研究各分野の「過去」の成果と問題の整理に発し、「現在」に遺された空白或いは可能性を確認して、「未来」の起点を据えることにある。ここでは「研究史」の実体が承認され、つまり「歴史」は永遠に「上書き」され得る／続ける叙述と観念されている。この観念はまた、八十年代以来の中国現代文学研究の主調である文学史再審、再叙述の要請が拠って立つ基礎でもある。今回の「郭沫若研究の現在」という討論も、基本的にはこの要請に応える個別作業の報告から成るものだが、従来の「上書き」の機制の相対化に繋がる実証性に裏打ちされた、着実な内容を示したと言えよう。

世上通行する郭沫若像は、彼の文業の実質とは関わらず形成された、或る強い印象によって「上書き」された結果としてある。そもそも歴史叙述においては、叙述対象を含む各年代全てのコンテキストの等質な再現は不可能で、現在に近い年代は情報も多く、細密な描述も可能だが、遠い年代の描述は簡略に赴くというパス・ペクトティブが作動している。このような、過去を見渡す視点が現在の一つの方に固定されれば免れ難い認識上の不均衡を軽視する時、「上書き」の機制は、叙述を単純化する暴力性を帯びる。それを回避するには、視点を複数設け、現実の具える幅と深さを意識しつつ、テキストを配置すべきコンテキストを能う限り精密に再現しなければならぬ。この実証性は、表象行為が本来具うべき倫理性の表現でもあるが、「郭沫若」を実証的に扱う研究はこれまで不足してきた。この不足を補うには、前述の原理的な思考を念頭に置いた上で、第一にテキストの精読と深い分析、第二に新たな事実の発見が必要かつ有効であろう。

第一のテキスト精読だが、その対象は詩や戯曲に止まらない。郭沫若は詩人、劇作家としての印象が強いため、一九二〇年代の小説

創作や理論的探求については、相対的に軽視されてきたようだ。私小説風の『漂流三部曲』の鬱屈した情調は今なお魅力的であるし、「残春」や「喀爾美蘿姑娘」等「心理小説」の実験性も注目されている。文芸理論に関する著述、『文芸論集』に収められた諸篇を、その理論の来源を究明しつつ、日本時代の郭における初期芸術観の形成過程に位置付ける作業は、十分行われてきただろうか。

第二の新たな事実の発見については、民国期文献資料のデジタルアーカイブ公開の進展が、これを後押しするだろう。例えば易君左（家鉞）という人物について。彼の「失了魄的魂」（一九二二）という短篇小説を、私はインターネット上のアーカイブで初めて読んだが、これは創造社および泰東図書局の様子を、『創造十年』とはまた異なる視点から描き、興味深かった。易が北京大学の学生時代、共に無政府主義誌『奮闘』を刊行した朱謙之は、『創造十年』にも少し登場するが、創造社、泰東図書局から成る「圏」内、或いは郭沫若周辺で両者が結びつく事態に、私の想像は及んでいなかった。更に、『泰東月刊』や、あたかも創造社の後継のように泰東図書局と深い関係を結んだ白露社の刊行物、日本旧制高校留學生が結び、郭や創造社のメンバーも関係のあった中華学芸社の刊行物は、今や容易に参照できるし、泰東の店主趙南公の日記も最近公刊された。これら「郭沫若周辺」の資料が近年大量かつ容易に利用できるようになったことで、「現実の具える幅と深さ」を反映した各年代のコンテキストの再現、そこへの「郭沫若」の配置、その結果として浮上してくるであろう立体的で斬新な郭沫若像の描画が、ようやく可能になりつつある。

「郭沫若研究の現在」は「中国現代文学研究の現在」でもある。従来の郭沫若像は、歴史叙述についての原理的な思考を欠く単純な「上書き」の機制に支配されていた。その機制の対象化に始まり、豊富化した資料を活用して、新たな郭沫若像を提示できるかどうかは、実は文学史再審、再叙述の成否を占う試金石なのである。

本号執筆者・翻訳者紹介（掲載順）

李斌 (Li Bin) 中国社会科学院副研究员・中国郭沫若研究会秘書

長

岩佐 昌暉 (いわざ まさあき) 九州大学名誉教授

成家 徹郎 (なりけ てつろう) 大東文化大学人文科学研究所

沈 衛威 (Shen Weiren) 南京大学中文系教授

藤田 梨那 (ふじた りな) 国士館大学文学部教授

上野 恵司 (うえの けいじ) 日本中国語検定協会理事長・共立女

子大学名誉教授

武 継平 (Tsu Jiping) 公立大学法人福岡女子大学教授

瀬戸 宏 (せと ひろし) 摂南大学名誉教授

坂井 洋史 (さかい ひろふみ) 一橋大学大学院言語社会研究科教授

編集後記

■今号は、予定よりほぼ1か月遅れの刊行になりました。第20号を「郭沫若・周作人交流特集号」にしたため、連載の著者の皆様にはご執筆の文章の掲載を半年間お待ちいただくことになり、まことに申し訳ない次第。お詫び申し上げます。

■今号には成家・上野両先生の連載、および昨秋の現代中国学会分科会の報告要旨に加え、お二人の中国人研究者の論考を掲載しました。巻頭・李斌先生の論文は、郭沫若逝去四十年間の中国における郭沫若研究状況の紹介と今後の可能性を論じたもの。高揚期、退潮期、反転復活期に分けた記述は簡明ながら内容豊かなものでした。とりわけ心に残ったのが、高揚期の後に訪れた退潮期（むしろ衰退期がよかつたか？）の、文字通り「沈寂」の風景でした。『文学評論』が「二十年近くにわたって郭沫若を研究対象とする論文を発表していない」とか、高揚期に次々に生まれた郭沫若関連の学会や研究誌の活動停止、刊行停止が続いたなどというくだりでは、刊行さ

れているはずの雑誌を探し回ったあげく停刊と知った、ある時の苦い記憶が蘇りました。また、郭沫若研究とは直接の関連はありませんが、翻訳の過程で分かった、中国歴史学界のアメリカ中国学への傾倒、欧米の新しい理論への熱い関心といったものに感銘を受けました。コーエンへの関心は明らかに理論や方法論に向けられていますが、ウエイクマンについては例えば民国期上海の膨大な档案資料を駆使して書かれたという『上海警察…一九二七―三七』などの実証研究のすごさへの感嘆から来ているように思えました。

■李斌先生によれば、いま、郭沫若研究は活況を取り戻しつつあり、若い優秀な研究者が次々に新しい成果を著書として出しているということです（先生自身も昨年『女神の光：郭沫若伝』（作家出版社）を出されました）。私はその多くは「以論代史」の呪縛を離れ「以史料論史」（史料によって歴史を論じる）が当たり前になった研究環境がもたらした成果だろうと思いました。

■今号のもう一編の論考、沈衛威先生の郭沫若の院士当選をめぐる研究は、実証研究の手法のような論文だと思いつつ読みました。こうした論文や、第十九号の廖久明論文（「郭沫若の帰国と廬山談話会準備工作の関係について」）などの出現は、実証研究が郭沫若研究の主流になってきたことの反映ではなからうかと思いました。郭沫若研究が活況を取り戻しつつある大きな理由は、実証研究の興隆に求められるのではないかと気さえてしています。

■以上は今号掲載の二つの翻訳論文の感想。ただ、誤解のないように確認しておきたいのですが、「郭沫若研究会報」は、論文だけの掲載誌ではありません。研究誌としての基本的性格は維持しつつ、会員の交流誌的要素も大切にしたい。郭沫若と創造社に関するエッセイや、作品の読後感、旅行記、回想記なども大歓迎です。これまで寄稿頂いていない会員のご寄稿を切に希望します。

■次号は十二月二〇日刊行予定で、原稿の締め切りは1カ月前の十一月二〇日ごろを予定してます。

■もうすぐ梅雨が明け、夏。皆様のご健勝をお祈りします。

郭沫若研究会報 第21号

発行日 二〇一九年七月二〇日

発行所 日本郭沫若研究会事務局

〒八〇〇・〇〇三 福岡市中央区谷 二・二〇・八・三二一 岩佐方

TEL 〇九二・七一五・二五五四 (FAX 兼用)

メールアドレス [jpankakukuen@gmail.com](mailto:jpankakukuen@gmail.com)

ホームページ <http://www7b.biglobe.ne.jp/~guamoruo/>

印刷 コロニー印刷 (社会福祉法人 福岡コロニー)